

副島：それでは、午後の部を開始させていただきたいと思いますが、皆さま方、ごゆっくりご昼食、お召し上がりになれましたでしょうか。今日は、お天気も良くて、暖かな日差しが注いでおりますので、保育者の皆さま方、とてもお似合いだなと思いながら、拝見しておりました。

それでは、これより、午後のシンポジウムを開始させていただきます。テーマは『子ども・子育て支援制度 1 年目ー改めて保育の質を考えるー』でございます。終了時間は、15 時 50 分を予定しております。なお、シンポジウムの途中、15 時前後より、15 分ほど休憩を入れさせていただきます。その際にシンポジストの先生方への質問を受け付けさせていただきます。

先ほどお配りしたレジュメの中にこのような質問用紙が入っていると思います。こちらのほうに質問がある方はご記入をいただきたいと思います。この休憩の時間の間に、担当の学生が受け取りに参りますので、お声掛けいただけましたらと思います。どうぞよろしくお願いいたします。それでは、シンポジウムの司会は本学教授永倉みゆきが担当させていただきます。永倉先生、よろしくお願いいたします。

永倉：皆さん、こんにちは。

午前中はとってもすばらしい話でしたよね。未来を支える保育者っていうのを再確認したような、とっても心が強められるようなお話を聞いた後半にはですね、新たに 3 名の登壇者もお迎えしまして、さらに保育の質とは何かということについて深めていきたいと思います。皆さん御存知のように、現在、子ども・子育て支援新制度が始まりまして、いろいろな保育の形が生まれてきていると思います。秋田先生のお話の中にもありましたけれども、この会場の中にも、実際、今の日本を表しているようないろんな保育の場から来てる方もお見えです。そういうところで、クラスとは何だろうかとか、1 日の流れっていうのはどういうふうにつくるんだろうとか、先ほども挑戦的な保育って話がありましたけれども、じゃあ、遊びって、どういうものなんだろうかってことを、改めて、また登壇者のかたがたと共に、皆さんで考えていきたいと思います。

秋田先生が、白紙のレジュメをお配りになって、私も、ほほうと思ったんですけども、今日の主役は会場にいる方、皆だと思うんですね。私たち一人一人が考える人で、作る人で、いる人だということで、ぜひ、後半の方では質問紙でもご参加お願いします。

それでは、早速シンポジストの紹介をしたいと思います。まず、一番私に近いところから、先ほどご講演いただきました秋田喜代美先生です。続きまして、お隣ですけれども、文京区立のお茶の水女子大学のこども園園長の宮里暁美先生です。宮里先生は、静岡大学の教育学校の附属幼稚園の教諭、東京都の公立幼稚園の教諭、そして、お茶の水女子大の附属幼稚園の副園長を経て、十文字女子大の幼児教育学科の教授ということで、保育者養成に携わって、今現在は、お茶の水女子大学の人間発達教育科学研究所の教授をしながら、文京区立の、先ほど申し上げましたお茶の水女子大学のこども園を 4 月に始められたところです。また、新しいお話が聞けるのではないかと思います。

続きまして、向こうのテーブルになります NPO 法人なのはなの理事長で、私立の平島幼稚園の園長である岡村由紀子先生です。岡村先生が、あおぞらキンダーガーデンという夢のいっぱい詰まった園をつくったのは 23 年前だそうです。現在は、先ほど申し上げました私立の幼稚園の園長を始め、教育保育施設のあおぞらキンダーガーデン発達支援のまほろば子育て支援センターの後と、それから案と小規模の保育所なのはなガーデン、あおいガーデンと、さまざまな形の保育の展開をされています。後でまた、貴重な話が聞けるのではないかと期待しております。よろしくお願いします。

そして、皆さんから見て一番右手にいらっしゃるのが、御前崎市の教育長、篠田暁美先生です。つい、私は先生と申し上げてしまったんですけども、現在は教育長でいらっしゃるんですが、磐田市の小学校の先生でお仕事をスタートされて、その後、藤枝市、清水市、御前崎市、掛川市の小学校を経て、新しく平成 16 年に御前崎市誕生と共に市の教育委員会の学校教育課の主席指導主事になりました。それから、菊川市御前崎市の小学校校長を経て、現在、御前崎市の教育長というところにいらっしゃる方です。全くさらのご経験の中で今日皆さんに大変力をもらえるようなお話が聞けるのではないかというふうに期待しております。

それでは、早速ですけれども、新しくご登壇いただいた 3 人の方々に、それぞれのいろいろご発表をお伺いしたいと思います。パンフレットの順で、最初、宮里先生からお話を伺いたいと思います。

宮里：それでは、皆さんこんにちは。私の時間、おおむね 20 分ぐらいということでありましたので、その中でお話ししたいと思います。でも始めに、午前中、秋田先生のお話を聞きました。秋田先生はたくさんのお仕事をされていて、私は、こんなに近くにいたのに、本で読むことのほうが多かったりしました。先生が語られる子どもの姿を見ながら、何だかわくわくしたり、また、もっと考えたいことが出てきました。

私たち保育者が保育について学び、また、視野を広げていくたくさんの示唆を得られたことを大事にして、私は、もうすぐにも園に戻って、先生たちに伝えたいと思っています。本当に、何だか急ですが、ありがとうございます。もうずっと秋田先生のお話を聞いていたと思ったんですが、私が、今始めている、小さなこども園の大きな挑戦、っていうお話をします。

本当に小さいんです。大学の中に出来上がった園です。文京区が出資をして、大学が土地を提供する。いわゆる公設公営っていうんですか、そういう中で出来た園です。面積がとても狭いんですけども、キャンパスの中を活用するっていう中で、夢を実現していこうとする。そんな辺りで、私は挑戦だっていうふうに思っている。その園の話をする。

私の資料は白紙ではないです。こういう資料があると、支えにしているのが、実はしゃべる私だ、みたいな感じなんですけど、そうもいきません。こちらも見てくださいながら、画像も見てください。私はずっと幼稚園で勤めていました。大学の養成も少ししましたが、大半は幼稚園にいました。あと、子どもを 3 人、保育園で育てました。幼稚園と保育園、

それぞれいいと思っていましたので、それを混ぜるのって、あんまり、どうなのって思っていました。

でも、新しい制度が出てきたのには、きっと大事な意味があるだろうと思っています。そんな中では、私は園の設立と運営、この4月から始まりましたが、ちょうど2年前の9月ごろから、運営の準備に、私は関わっておりましたが、そこで、ずっと考えていたことは、そして、今も考え続けていることは、こども園って何、っていう問いです。そして、いろいろな方と出会い話をしていると、困難さが語られがちだなと思いました。なぜ、困難さで語られがちなのかっていうのも、とても考えたいところです。

私は常に、子どもから考えようと思っています。「こども園の可能性って何？」という問いも、やっぱり、子どもから見ていこうと考えました。4月に開園してからの日々を、ちょっとたどる感じのお話しをしたいと思います。

こども園は1号、2号、3号のお子さんがいて、2号、3号の方は、4月1日から来ます。で、1号の方は、入園式を4月8日に行いました。1号と2号で始まりのタイミングがずれます。始まりのタイミングが一緒だったことしか私は知りません。幼稚園の教員だったから。そうすると、漠然とした不安が浮かびます。子どもにとってどうなのかと。実のところ、その不安を抱いていたのは、保育者である私だったのだと後で気づくことになります。

私たちは、ちょっと知恵を絞りました。まず言葉のマジックで4月1日を「うれしい始まりの日」ってしたんです。文京区は、とても待機児童が多くて、こちらの入園に決まられた保護者の方に2月にお会いしたとき、皆さん、扉を開けて、抱き合って喜ばれたり、無認可や、いろんな所を経て、ようやく入れたっていう人たちが喜んでくださいました。私は、割と規模の大きい園にもいたので、今の園は、とっても狭いと感じていました。だから、「こんなちょっと狭い園庭で」って、ちょっと申し訳なさそうに言うと、「先生、園庭があるだけいいです」という答えが返ってきました。ああ、そうかって思ったんです。喜んでくれる人がいるっていうふうに思いました。その方々と始める4月1日は、「うれしい始まりの日」っていうふうにしてみました。

最初は、1号の方にも、4月1日に来てもらおうかなって考えたんです。全くの新しい始まりなので。でも、落ち着いて考えたら、ちょっと変と思ったんです。4月1日に1号の人に来てもらったとしても、翌日からは、やっぱり休むでしょう。何だか変、それ、自然じゃない。だから、それはやめて、4月1日に、まず「うれしい始まりの日」としました。

小さな黒板に新卒の先生が字を書いてくれました。その字は、その私たちの気持ちであり、新卒の先生の気持ちだなと思ったけど、こんなことを書いて待ちました。そうしたら、皆さんがやってきました。どの子どもどの子ども、どのお母さんも、みんな、ちょっとピカピカの園に、わくわくしながら始めたその日のことを、私は、きっと忘れないだろうと思います。

でも、4月1日を過ごしてから思っていました。ここに来てない人もいるよね。ここにはいない人たちもいる。ここで1週間の差がある。もう大きな溝になってしまうのかしら、1号

の子と2号の子の間に。でも、そんなこと全然なかったんですね。最初の1週間過ごしな
がら、「8日の日になると、もっと仲間が増えるよね」って言うと、みんな楽しみにしてま
した。その2号の子たちが、1号の子と2号の子っていう名前はもうこの際いいやと思って
使うんですが、4月8日を、今度は「みんなの始まりの日」と呼ぶことにしました。

「入園式」といいますが、「みんなの始まりの日」と呼んでみました。お祝いに木のペン
ダントに、一人一人にちょっと木製ペンで絵を焼き付けたものをくばりました。こんなこ
とをしながら、みんなの入園を待ってたのを懐かしく思いますが、そんなふうにしてお待
ちし、そして、私の園の特色は、大学のキャンパス内にあるってことです。キャンパス内
は本当に安心です。ぜひ、少しスペースにゆとりのある大学には、本当に開放して、子ど
もたちの遊び場にしてほしいなと思うぐらいです。

こんな調子じゃ、時間が間に合わないってことに、今、気付いたので、ちょっとテンポ
を上げます。

最初のほうにも書きましたけれども、とっても小さな不安ですよ。例えば、始まりの
時期がずれるってどうなの、難しいよねって言っちゃう言い方もあるけれども、子どもに
目を転じてみたら、子どもたちは全然気にしてない。それより喜んで。そろって始まる
ことしかしてこなかったから、不安だったのは私だったんだと気づく。「今日来て良かった」
っていうことがあるように、今日という日の中で子ども達は体験し、育っていくんだな。
こんな調子で、今までの当たり前を崩しながら、多様な時間帯、多様なあり方をする方々
が、みんな仲間になるような園運営って、どんな工夫をすればいいのっていうのを考えて
やってきているように思います。

今までは、「おはよう」って子どもたちを迎えてきました。今は、私「おはよう」って迎
えられてます。そして、出掛ける時には「先生行くの？明日、また明日ね」って見送られ
ます。

よく幼稚園からこども園に異動した方が、自分たちがいないときにも子どもたちがいる。
あるいは、そこで何かいろいろな遊びがあるっていうことに、遊びの継続性とか、いろん
なことを思われ、不安に駆られる方がいますが、私は、それはどうなのかなって思ってい
ます。遊びをつくるのは子どもですし、子どもの中に連続性があるのならばそれでいい。
その伴走者としての保育者は、子どもへの気づきを保育者間でリレーすればいいんじゃな
いか、っていうふうにも思うわけです。こども園のことは誰に聞けばいいって思ったら、
それは子どもに聞こう。子どもの姿から、大切な問いの答えを探したいと思っています。

そう言っても、始めたばかりなので、これからですね。この辺は、ホームページにも
出していますが、本園のコンセプトになりますので、そこはちょっと飛ばしまして、こん
な人数だとかいうのも飛ばしまして、オープンスペースについて少しお話をします。

オープンスペースだっていうのは、したくてしたっていうのもありますが、せざるを得
なかったっていうところもあります、狭いので。でも、可能性はここにあるだろう。課題
もあるだろうと思います。でも、課題があるから工夫がありますので、それについても、

また考えていきたいと思っています。

本園は時間担当制ではなく、完全なシフト勤務です。平日にも振休が入りますので、土曜勤務をした場合。そうすると、どういうふうに保育をリレーしていくかが課題になる。でも、子どもがつくる保育ですから、子どもがつくる遊びですから、そのところをもっと徹底して考えていけば、実は、保育者主導の保育から脱却するチャンスになるっていうふうに考えるわけです。

あと、設置面積もぎりぎりです。だから「預かりの部屋」っていうのが無いんです。今まで遊んでいた、昼間遊んでいたお部屋で、その後も遊んでいく。「それって、どうなの？」っていう問いも発しました。でも、さまざまな時間帯を過ごす中で、その子は何を体験しているのか、メンバーが替わるので、同じ空間でも遊びが変わっていくという事も見えてきました。いろんな工夫の中で、一見マイナスに見えることをプラスに転じられるんじゃないかなと、今、思っています。目的に合わせて部屋を変えられないという難しさに対して、どう対処したかの話は、ちょっともう1年ぐらいやりまして、お伝えしたいと思います。

心に刻んでいることです。なんか私の決意表明みたいな感じになっちゃってますね。「困ったで止まらない」って、わざわざ書いてるぐらい困ってるんですよ。困ったことはいっぱいあるんです。でも、そのときに結構やれるとか、意外にいいねとか言いながら、やってるんです。例えば10年間限定の園なので、プレハブ建てなんですよ。そんなに悪くないです。でも、外から見ると、ちょっと変っていうので、見学者の方が来ると、「外よりいいですね」って言うんですね。で、「はい、外よりこども園って呼ばれてるんです」って言っています。(笑い) そういう建物なので、窓に斜めの棒が付いちゃっているんです。初めは、それ見て、そんな話を聞いたとき、心つぶれたんですが、今、そこにツタとか絡めて。「意外に、これ、使えるね」って言っています。

そんなように、結構やれるっていうのを見つけていく。あと、語り合いの中心に、いつも目の前の子どもを置く。先ほども秋田先生のお話で繰り返し出ていましたように、やっぱりどんなに短い時間でも語り合えるはずだと思っています。でも、それはまだ、なかなかつくれていないですね。でも、そこをやりたいと思っています。さて、それでは、そのような日々を過ごす中で気付いたことを、とてもマニアックな感じなんですけど、3つお伝えします。

その1、眠りへと誘うってすごい保育行為なんだねっていうことです。私、幼稚園教員だったので、知らなかったんです。子どもも育てていたというのに、私は自分が寝るっていうやり方でしか子どもを寝かしつけてこなかったのだから知らなかったですね。こんなふうなオープンスペースです、2階ですね。本園は、今年は5歳の子がいませんが、3歳、4歳、4歳も全員が寝るとは限りません、2号の子でも。2号の方でも、もう眠りを必要としないという子は寝ませんね。遊んでる子もいれば、寝る子もいるっていう空間の中で、実は、とても音が響くってことがわかりました。

はじめは「自己申告」にしてみたんですね。そうしたら、あるとき、面白かったですよ、「いよいよ今日、3人しか寝ないって言いました」って。でもそれはまずい。保護者の方と話すと、「やっぱりもう疲れ切ってます」っていうので、寝られる園にしなきゃいけないということになった。それが最初の1週間ぐらいにありましたね。そこから、いろいろな寝かせのプロも登場する中で、あの幕の後ろでは、ちょっと暗くしたり、トントンってしたりしてますね。

そんな中で、これは4月の終わりごろですけども、私の園の地図が目に入らないと分かりにくいかもしれませんが、ちょうどコの字型になっている左側っていうんですかね、そっち側の角を、この日、雨の日だったので、外では遊べないので、3歳の2号の子は、今、午睡していますが、4歳の子などが、静かに遊んだりしています。ここでいいなあと思ったのは、ここにはちょっと暗いですけど、3歳の2号の子で、寝たほうがいい子なんですけど、まだ眠れないっていう子が、ちょっとこっちの静かな遊んでいるところを見たり、ちょっと遊びしながら、眠くなるのを、自分の体に聞いている感じの時間があって。

こんな中で、いったい眠れているんだろうかって、「眠りのゾーン」のほうをのぞいてみました。そこにすごい深い眠りが訪れているのを見たときに、私は、「ああ良かった」って思いました。すぐには眠りたくない子どもと、そういう子は、ちょっと少ししてから眠る。そして、よく言っているのは、気持ちよく寝ている友達の姿ほど、眠りへと誘うことはないですね。眠りへと誘っていく。これは、1〜2歳の保育スペースでも同じやり方をしています。

でも、私、このお話をしたときに、次第に気付いたんですね。実は、4月の初めに眠れなかったのは、このスペースのせいだけではないだろうと。その場所は初めてで、そんな中で眠れるはずがない。眠ってくれる、子どもが眠れる状態っていうのは、本当にその場所が安心で、全てを投げ出しても大丈夫っていう、「安心感」や「信頼感」の中でしか、本当は眠れないだろう。そこへと誘う行為が、本当に深いし、非常に重要な保育行為だってことを、今学んでいるところですね。眠りについては初心者ですので、この辺を語ると、保育のプロの人たちが、「あ、今分かったか」みたいな顔でうなずくんですが、初心者もいいでしょう。初心者の言葉です。

その2です。これは、「子どものつぶやきから見えた、そのわけを語り合うことで」ということなんですけど、本当に小さな例です。こうやって土を掘ってる子たちがいました。私は、4月、幼児のほうのお手伝いすることが多かったので、この写真を見たときに、「ああ、へえ、ちいさい人も好きよね、土いじるの」って言ったら、すごくあきれられました。「違うんです、これはただの土いじりじゃないんです。これは、憧れの人のまねなんです」って言われました。あこがれの人とは用務の杉浦さんのことでした。

この方はすごい働き者で、新設の園でたくさん笹が生えていたので、花壇が駄目だったんでそのことを伝えたら、気が付いたらいつも花壇で、向こう向いて掘ってたんです。この辺が戦利品です。杉浦さんは、そのうち、ゴーグルまで着けて、土が飛ぶんですね、そ

んなふうにしていた。その姿を誰が見ていたかという、1階に0、1、2の保育室があるので特に2歳の子が、すごく見てたんです。なので、庭に出ると、「スギウラさんやる」って言って、先生にバケツとスコップを要求するようです。その杉浦さんは、とってもいい人でこうやって。そして、とっても優しいので、時には仕事道具を奪われ、これ、わざと奪われてるっていう説もありますが。

でも、このとき思ったのは、この保育者たちはすごい、ということです。「スギウラさん、やる」っていう言葉の意味が分かってるんですね。そうじゃなかったら、バケツとスコップって聞かれても、「ああ、今はまだ道具は出さない」なんて言っちゃうかもしれない。でも、ああ、あのスギウラさんをやりたいんだと理解している。聞き取れない声をちゃんと聞き取って。「スギウラさん」にはバケツとスコップは必須のアイテムだとわかっている。

そんなことが語り合えた研究会は楽しかったです。子どものつぶやきの訳に気付く語りは、もっとよく見ようという思いへ向かわせる。子どもの“やりたい”にはわけがある。それを大事にする保育を作っていきたいと思っています。私の園は—この最後の2行は決意表明ですね—まだ全然何もしてないので。3年後ぐらいに成果を発表したいと思って、あの辺に園の関係者がいるので、一緒に頑張りたいと思うところです。

さて、そんなかわいいエピソード、これ、2歳の少年、ペットボトルから水が出ました。隣の人が吹くと、ヒューッと出るのに気付きます。やったら、ちょっとあっけにと取られたけど、次の瞬間、彼もすごい吹いてるっていうね。なんかこんな子どもの、「ああ、こんなふうに気が付いたことをまねしてみようと思ったりするんですね」なんて話が出始めています。語り合うことだなと思うので、語り合いの時間をもっとつくりたいと思います。

さあ、最後なんですね。やっぱりちょっと出ちゃいますが、ちょっとだけお話しさせてください。「出会いに向けて開いていく姿勢」。可能性は無限だなあ。「発信」と「受信」ってことを思っています。新しい園で、私たちだけでなく、保護者の中にも期待度が高かったです。なので、そんな中で、今大事だっていわれていることを、やれる限りの中でやってみようと思っています。特に、この2つのことでお話しします。

玄関の掲示、そんなに大きくないです。そんなに大きくないって大事ですよ。1つのテーマでちょうど埋め尽くせる広さ（狭さ）。このスライドの上半分ぐらいの大きさなので、主に私の守備範囲にして、こうやって掲示をします。そして、この写真には、ちょっと訳があって、語り合いの姿に、ちょっと写真を残したんですが、こうやって掲示をした中に、実は8月にこんなすてきな取り組みを、大学の方と一緒にしました、「ライフ×アート展」。この話は、またいい話なので、どこかでと思いますが、それを8月の2日から4日11時から18時、見ることができますって、保護者に伝えました。何人かの方は、見に来られました。でも、来られない方のほうが多かったと思います。すてきな会だったんです。

でも「ライフ×アート展」が終わって、全部撤収したときに、私たちは、それをもう1回園の中に飾りました。飾りたくて飾ったんですよ、あんまりきれいだから。次の日には天井から落ちたとか、いろいろあるんですが、みんなで夢中になって飾りました。そうし

たら、最初にお見せした写真です。それを貼っていたら、「ああ、これ、行きたかったんです」っていうふうに言ってくれたお母さんがいました。「ああ、ライフ×アート展、行きたかったんですよ」って。言いながら。その声が嬉しくて「こんなふうだったんです」ってお伝えしました。

行きたかったっていう思いに応えられてよかったと思いました。行きたかったって思っただけにいるうちが大事だろう。そこを、行けないになってしまわないように、行きたかって思いををつなぐっていう意味があると思いました。多様な時間、多様な状況を抱えている方たちといるときに、これはどうしても伝えたい、これはどうしても共有したいっていうことがあるとしたら、それが実現する方法を工夫する。工夫する責任は私たち側にある、というふうに思います。

もう 1 つが、保育時間の中では限りがあるので、先生方の出勤無しの「親子でワクワクデー」というのをやっています。これ結構、あと知人、友人、家族で賄ってるんですが、うちの夫が「ダンゴムシ協会」っていうのをやってて、ちょうどいいんですね。初回はダンゴムシ探しをしました。キャンパスの中でダンゴムシを探し、こんなふうに同じ視線になって。で、これはダンゴムシレースをするみたいなことなんですが。来年の 1 月と 3 月は、保護者にちょっと企画をお願いしました。「やってみたい」という人がいるので、1 月は、大学の先生がいましたね。何が出来るか楽しみです。

ここら辺の、もう、ちょっと飛ばしまして、本当にこんな形で、私としては、最初にも申し上げたように、こども園という制度に対しては分からないです、どんな意味があって。でも、今思っていることがあります。多様性、多様なあり方を大切にしながら、子どもは子ども同士、関わり合っている。分けしなない意味がきっとある。保護者が何を喜び、だけど、親の便利ばかりではない。子どもがちゃんと育つてことに向き合ってますっていう共通理解をどうつくるか。そんな辺りが大事だろうなと思っています。

すみません、やっぱりちょっとオーバーしてしまいましたけれども、取りあえず、皆さんにまずお伝えしたいなと思ったことは、ここでお話しできたように思います。お聞きいただき、ありがとうございました。

永倉：宮里先生、ありがとうございました。今、とても楽しい園の様子が、写真でもうかがえたんですけども、まだ 8 カ月くらいですね。

宮里：はい。

永倉：本当に 8 カ月の間に、こんなに、今、育ってくんだなっていうふうに思いながら拝見してます。ありがとうございました。今の分けしなないところとか多様性というところも、またこれから、どんなふうに、また他の登壇者の方が語られるのか、その辺を楽しみにしたいと思います。続いて、岡村由紀子先生のご発表をお聞きしたいと思います。

岡村：そしたら、今、楽しく聞いていた続きができるかどうかは自信がないんですが、ああ同じだなというふうに思うところがいっぱいありました。私は、パソコンが全然得意じゃないので、文章に換えました。今からお話しするところは、「おわりに」の部分を中心な

んですが、私がどうしてそういう考え方をするかがベースに無いと分かりにくいかなと思って、1枚、2枚、3枚半も一応書いてありますので、簡単にキーワードだけを言っておきますね。

保育は、人間を育てる仕事であって、洗濯機を作っているようなことではないので、洗濯機の場合は、回転ができなくなればクレームになるけど、ここで育てた子どもが、将来、どうなっていくかということが、本当は問われるっていうのが、保育っていう仕事かなというふうに思ってます。そして、保育園とかが教育はしてないとかっていいいますが、それはないですね。保育園で向かい合ってる保育士さんは、声を大にして言うべきだろうと私は思っています。赤ちゃんが泣く、そこに、あやす、おむつを替えたりミルクをあげる。このことで、赤ちゃんが、何が育つかって言えば、泣いてもいいんだよという自己肯定感の土台が育つわけです。

こうやって、丁寧に丁寧に育てていくことで、愛着関係が育って、将来の「人間ってすてきな」って心が育っていきます。保育という言葉は養護性を持って自立をしていくという、教育の中に養護性が入ってるっていう言葉だろうと思っています。

保育の実際は、そこに書きましたけど、人間が1人で生きていくための生活、その1つに睡眠とか排せつとか食事とか生活がある。5領域とかいいますが、一番の中核は、睡眠を中心にして園に来た場合、赤ちゃんが生まれたばっかの時、体内リズムが25時間ですね。これが24時間になってくっていうのは、本当に大変な作業で、そこがやっぱり先に宮里先生が言ってましたけど、安心できる所でなければ、赤ちゃんは寝ないんですね。これが最初の園の仕事かなって思ってます。

保育が生まれる構造をなぜ書いたのかっていうと、私は2000年の頃にいわゆる「気になる」子っていう子どもたちと出会いました。これで、丁寧に子どもを見てくれるのかなって思ったら、残念でした。療育的な保育が広がり、発達課題が保育課題にすり替わっていききました。集団保育は、子どもが集まることによって生まれる教育力を使って保育をしているところです。それがカードとか園のシール、ご褒美シールでトイレに行くようになるって。そういうことで、うん？って思って、疑問になって、ここで整理をしました。

今年、北海道大学の川田先生の文に、保育学会も出てましたけど、出会って、とても整理され、いわゆる発達の理解と実践的理解で保育は生まれるということです。中心になる遊びの考え方ですが、それは面白くなけりゃ、それは遊びっていわれないんだろう。保育課題を出して、子どもが「先生、遊んできていい」って言ったら、それは子どものせいじゃなくって、自分が、どこに子どもが興味関心を持てなかったのかという自分のホイップアップのチャンスにして、子どもを理解を深めて、指導を深めていくという。

資料で、4番のラスト1番のところです。遊びの大切さの。1つは、やっぱりいろんな力が育つっていう、つまり、結構見える力のところはあるのですが、これは三重大学の河崎道夫さんです。名誉教授の方ですけど、発達の1983年に書かれた遊びの本にあります、民主的選択手段の感性的土壌をつくり出すことこそ、子どもの遊びの最も大きな発達の意

義である。遊びと言にいうんですが、その質が問われるっていう仕事に関わっているということです。

5番は、保育をつくるときの3つの視点をここに掲げています。これは、ちょっと後で重ねて話します。実は、ちょっとまとめのところに飛んでくれますかね。「まとめ」というところです。終わりにっていうところですが、私は、幼稚園と小規模保育所と、それからもう1つ認可外保育施設に関わってます。その年数は24年で、通常の私立幼稚園に17年いましたので、合わせて40年っていうことになります。「子ども子育て新制度」が始まった頃、どうなんだろうっていう永倉先生からのメールが来たときに、「ええ、もう答えは1つですよ。別に施設が変わろうと経営主体が変わろうと、それは関係ないですね。どんなとこにいても、その子どもの願いをくみ取って育ちを保障するのが、私たちプロ集団の仕事である。」とお話ししました。

私は、昔、夜型保育というマスコミの人とか、夜間の医療をやってる人とかっていう、そういう24時間稼働しなければならない職場のお子さんが入ってる夜間保育を東京に見に行ったんです。それはすごいカルチャーショックで、落ち込んでいるときに、先輩のある保育園の園長先生に言われました、「岡村さん、子どもはね、どこにだっているんだよ。そこで、一生懸命どういう条件でも発達保障をするのは、あなたの仕事ですよ」って言われて。うん？って思いました。

私の中に、きっとプライドみたいなのがあって、それがガチガチに崩れたときかな、っていうふうに思って、これしかできないんじゃないかって、こういう条件になったら、今、何をしたら、子どもが一番最高に笑顔が出るかなっていう。そうやって走ってきたもんですから、後ろを向く暇がない。何かがあると、今、どうしたらいいのか問い続けて今があります。ですから、私は、この質問1つの討論の柱の中に、どんな形態、どんな運営主体に変わっても、仕事は変わらないよっていうことを書きました。

そして、無認可をやり小規模を2つやってますが、幼稚園経営していて、改めて思うことは、地域との密接な交流です。小規模をやって、そこは地域が過疎化していたので、散歩に行くと、出てきてくれるんです。そこの家の盆栽の葉っぱを子どもに1個ずつおじいちゃんがくれてたら、丸裸になり、嫁とおじいちゃん、なにかけんか腰になっちゃったとか、うちの外にあったおもちゃを、いわゆる子どもの通る散歩コースに出してください。本当に子どもが通ると拝むみたいな感じで。

最近、そこの施設長が近所の方に、「園が来て、町内が変わった」と言っていたり。私は、無認可施設のあるところもすごく密接で、歩いていると「ほら、おいで」って言っておひなさんのときのつるしびなを見せていただいたり、ゲートボール場に行くと、「ほら、これ、食べて行きな」みたいな感じで、追っ掛けてくれたりする姿があります。

改めて小規模もやって、今までのことで、この地域との中で、いわゆる私ふうに言うと、たくさんの大人に愛されて、子どもは幸せになる。改めてこの地域の柱はとても大事なんだよねっていうことを感じ、園の定員っていうのは、どういうのがいいんだろうって

うこともあるんじゃないかと考えています。

それから、事例を、ちょっと 0 歳児を含めたこの 1 つ左側なんですが、『0 歳児、触りたい』という柴田明梨さんのものです。今年 4 月に県短を卒業して、これは 2 カ月目のものです。これは、後で言う研修会で、彼女が出したものです。ちょっと読んでみます。

「給食を食べ終わって着替えも済んだモモカとユウセイ。隣同士、布団に横になっている。先生は 2 人の間で、子守歌を歌って、トントンしていた。モモカはまだ眠くないようで、1 人で「キャッ」て言って笑っている。ユウセイもまだ起きている。先生『モモちゃん、ねんね』、足をなでて眠るのを待つ。すると、少ししてモモカがユウセイのほうを見つめ、片手をユウセイのほうへ伸ばした。モモカの伸ばす手に気付いたユウセイ。少し見つめてから、同じように手を伸ばす。しかし、先生が間にいるため、あとちょっとのところで手が届かない。モモカ『うっ』、叫ぶ直前。（私、補足、モモカは思うようにいかないとき、よく叫ぶ。）先生、すかさず避ける。すると、2 人の手が届く。モモカは満面の笑みでユウセイの指を触ってる。ユウセイもにこにこしてる。先生『ふー良かった』。2 人とも笑ってる。モモカは満足したのか、その後ユウセイよりも早く寝た。＜考察＞先生は何も言葉を掛けていないので、実践記録としてはどうかと思ったけど、2 人の触りたい気持ちが一致して、手を伸ばし合ったことが、すごく感動したので、「**ちょこっと記録**」に出しました。これからの関わりが、とても楽しみです」っていう。これ、2 カ月目の新採さんです。

すごくないですか、これ。後で記録のここをちょっと分析させていただくんですが、0 歳児を含めた小規模は、こういう姿の中で育ち合うんです。

もう 1 つ、終わりの後ろに事例ですね。「元気が出るお土産だよ」っていう。最初、サクラコちゃんっていう 0 歳児を熱があるので置いていきます。先生は、「サクラコちゃん、今、散歩に行けないんだ」っていう。この辺をやってるのが、0 歳児担当のスエナガさん。次は 2 歳児担当です。2 歳児の人が、「今、お熱が治ったばかりで、まだ元気ないんだ」。モモちゃんは、2 歳児の子。「じゃあ、元気が出るお土産持ってくるね」。他の子も「元気が出るお土産あるかな、なんかな」って、口をしながら出発。

歩きながら、これは 2 歳児担当のヤマナシさん。「サクラコちゃん、何のお土産にしたら、元気出るかな」。サキ「うーん、そうだ、石やない？」「そうだよ、石だよ。石いいねと大盛り上がり。で、かっこの中がつぶやきです。「ええっ、なんで石？」。ここへ、突っ込まなかった先生がすてきなんですけどね。「ケイちゃん、サクラコちゃんは、何で元気なかったのかね顔、赤かったね。」「スエちゃんにべたってね」って心配する。

防災センターっていうところで遊んでたら、全然忘れちゃって、これもまた 2 歳児のすてきなとこですけど。急にサキちゃん、「あった」って言って、その石を持って帰ってくる。で、神社を通ってきたら、いつもは「大きくなりますように」って言うのに、今日は、「サクラコちゃんが元気になりますように」。誰も言ってないんですよ、子どもたちが言う。すてきて、先生は心の中でつぶやく。

給食に戻ってきたとき、「元気が出るお土産見つけたよ。神社で南無南無してきた。元気

になりますように」って、2歳児。で、0歳児さんの先生が、「うれしいね、ありがとう」。おやつを食べ終わって遊んでいると、モモが小石のたくさん入ったビニール袋を持ってきた、サクラコにお土産だと言って渡してくれた。

当人、0歳児ですから「??」です。でも、「サクラコちゃんが元気出るお土産なんだ、うれしいね」って言ったら、こうするように、「ああ、これこれ」って、0歳児の子。で、ここで大きな家族、兄弟のように生活しているのはなガーデン。こういう心のつながりが、年齢を超えてできることが、とてもすてきな場面でした。みんなに愛されて大きくなることを、0歳の子も感じていくことができる園にしていきたいです。

で、終わりの文章に戻ってください。2つ目のポチですね。0歳児を含めた2年限保育の中での子どもの育ち。特に0歳児っていうのが、やっぱりなかなか普通の通常の保育園の場合は、縦割り保育っていうのをやっても、入ってこないんですが、小規模の場合は6、6、6です、0歳児からっていうことで、こういう「関わりが大きい家族」と「同年齢のクラス」という、この両方があってとても保育の中身に関して、考えさせられるっていう2年間になってると思います。

このラスト、その条件をやってるのは、たぶん18人っていう小規模なので、本当にこういうので量産して、保育の質はっていうのもあるんですが、乳児の保育を18人ぐらいに減らして、ちょっと多く関わるっていうことが、相手を分かり合うということでも、私はいいのではないかなって言って、とても0歳児と他の1歳児2歳児の関係性が豊かになるよなっていうふうに思っています。

そして、もう1つ、私の行っている平島幼稚園っていうところは、預かり保育を充実し、幼稚園でやっていくことを決めました。でも、幼稚園でやる預かり保育の質ということを考えて、子育て支援棟を造ってもらって、そこに畳もあって、おうちぐらいの屋根の設計でやっています。教室ではないんです。

この7月から始まりました。その前は園のお教室でやっていました。最近、そこで担当してる先生が、(私、岡村なので)「岡ちゃん、すごくうれしいことがあったよ」って。「何、何、何」って聞くと、『ただいま』って子どもが帰ってきた」って言ったのが9月ぐらいでした。先月でしたか「ただいま」って言った後に、「幼稚園疲れたっけ」って帰ってきたって聞き、「やったね」って、その先生と喜びました。

大人の労働時間は8時間です。保育園なんかは11時間、12時間やらないと、認可園はできないです。本当に、子ども心にとって、この一緒という共有が大事な時期に、どんなだろうっていうのが私の疑問で、夕焼けは、親子で帰るって、そういう多様な支援があってもいいんじゃないかっていうふうに考えてる中で、ささやかにやり始めています。

ここに帰ってきたら、幼稚園で使っているお道具箱とか、そういうものは全部使いません。ここで、みんなで使うはさみとか折り紙とかおもちゃを替えて、みんなで遊ぶというふうになって、施行が始まったばかりですが、そういうふうに、幼稚園っていう選択をした中でも、いわゆる、これから5時半とかってくる子も含めて、そういうことをしてい

ます。

2つ目で、終わりの後半のところです。「保育集団の質は保育の質」って言って、「保育実践は、マクロの視点とミクロの視点が具体的に向かい合う」ということを、山梨大の加藤繁美さんが言ってます。ただし、実践は、この①と②を交流を含めた集団の園内研修で鍛えられる。つまり、園内研修っていうのは1人じゃないんですね。多様な視点を学ぶ。それは、自分の保育も多様な視点、それから、子どもの見方も、多様な視点になる。この園内研修が非常に保育の質を保つときにキーワードになると私は思っています。

大人の視点になると、子どもの最善の利益は難しい。いわゆる保育者が立場や肩書き、経験を中心に語るとは、大人の都合に偏りやすく、子どもを中心に語ることができにくい。経験と勘によると、学びが衰退してくる。で、実践を科学するという研究から始めたのは、4年前です。県の私立幼稚園協会の研修テーマに、記録を書くということの中に、山梨大学の加藤繁美さんに関わっていただき作った「ちょこっと記録」がベースになってます。

2年目にやめようかなと思ってたときに、若い先生が、「これを続けたい」って言ってきました。なぜかと聞いたら、「楽しい」って言ったんです。私は、思ってもみなかったです。だって、自分の問題意識としては、自分がもうこの年になってきて、私がいくら言葉で言っても、いくらここに掲げても、今、これをやってるのは、ここにいる仲間が作っているわけで、このみんなが、楽しく保育を、今まで大事にしてきた園の歴史とか、保育構造を大事にしながら、保育カリキュラムを鍛えていかない限り、この保育は私が死んだら終わりと思ったんですね。そして「ちょこっと記録」は、どういうのかというと、目的は保育の楽しさを知る。日常の保育実践を振り返り、次の日からの保育の力とする。

私は大学でも教えているもんですから、私の周りの他の若い、現場に行った学生さんの悩みが、いわゆるカリキュラムの学習会とか、いろいろやると、泣きたくなる、もう辞めたくなる。今、保育士が辞める率が高いですね。兵庫大学の短期大学部の黒澤先生が、最近、そういう本を出してますね。本当に夢を持っていたと。その大きな柱が、結局職場の人間関係にある、特に若い先生たち。これは違うんだろう。だからといって、「あなたの趣味は何、私の趣味は」そういうのは、私はできなかったんですね、そういう関係で。子どものことを語って、ここでプロ程の力を付けながら、集団の園の集団力を高めたかった。

日常の保育と保育目標、年間カリキュラムと結び付け、豊かな保育実践の土台をつくる方法を、月1回の2時間です。実践1カ月を振り返る。自分にとってすてきだった、楽しかった実践を記録するだけです。実践記録は事実のみです。実践中の保育者の思いは、(考察は記入しても記入しなくてもよい。どうして心が動きだしたのか) っていうところの表題にぴったりの題を付ける。ここまでだったんです。

これだと、保育カリキュラムにつながらないので、3年目からは分析を試みました。分析の視点が、そこに書いてあります。分析の視点は、まずこの遊びが興味関心があるのか。で、自分は一生懸命やってるつもりでも、子どもは主人公で、主観的で意欲的になるには、

本当にその遊びが興味関心がないときは、子どもは心が動かさないんですね。それと、これは、子どもの最善の利益という、子どもの権利条約の視点であるってことです。

2番目の仲間関係、この実践の中で、仲間の関係はどういう中で、こういう実践が生まれてるのかな。これは、人が人の中で育つ、集団保育場面の、まさしく療育保育との違いですね。教育学者の大田堯さんが、人間の特徴を3つ言ってます。

その1つは、みんな違っている。みんな違ってみんないいんではないんですね。みんな違ってる。2つ目、自己喪失。人は、自ら変わる。変わりたくなるような環境をつくる。これをやってみたい。あっちで、ずっと滑り台やってる子が、ここで、今、面白いことがやってる。「どうして来ないの」ではなく、あの子がこっちに行ってみようっていう環境をつくり出すのが、私たちで。そういうのが人の関係と物の関係の環境があるだろうっていう。その人の関係を見いだすのは、この②です。で、3番目は、指導です。遊びは、指導があつてこそ面白くなる。仲間を求めずにはいられない子どもたち。そういう気持ちにするために、どういう指導をしたか。そして、この中で、どう、何が育ったかっていうのです。

その視点で、もう1回、さっきの県短の柴田さんの事例を見てくれますか。最後の考察に、彼女はこう書いてある。「先生は、何も言葉を掛けていないので、実践記録として、どうかな。指導っていうのは、こうした何もしないっていう指導もあるんだね」って。「すごい、すてき」って言うことになるわけですね、指導っていうと、言葉で全部。でも、「ここに彼女がいるっていうことで、この2人は、こういうふうになったんだよね」って。

それから、このモモカちゃんとユウセイちゃんは、仲間とか、仲間と一緒に楽しいっていう前の、なんか知らない感覚が、0歳児の中にこんな大きい力が育っているんだよね、とかっていうのを、改めて感じたみたのが、この分析をした後です。

一番大事なのは、実はここなんですね。参加者がいろいろな視点から学びを発言する。これは、柴田明梨さんのやったことではなくて、この実践を読んだ参加者が、みんな、1言。「この実践から何を学んだの」「あなたですよ。」って。私のような年齢の人も含め、若い人も含め、自分の言葉で作ることが大切です。

そのときに言ったのは、こうやって、彼女がストレートに書ける力を、「あなたって、すごい」って、「このたった2カ月の中に、こうやって、もう何十年やってもこういうふうに子どもの視点って捉えられない、見えないこういう「関わり」を捉えられるって、すごいすてきだね。」で、こっちの先生は「0歳児って、こんな力があるんだって、すごいよね」って。

その発言を、ちょっとだけ意識して、②です。「指導のこと」で学べたのか、これは「発達っていう視点」で学んでいるのか、「人間関係」なのか、「遊びの面白さ」なのか、「指導の問題」なのか、その他「環境」が良かったのか、とかっていう視点なんですね、これも。その月の月案のどこでこれを学んでいて、「やっぱりこれでよかったね、違うね」っていう。それが12枚集まったところで、年間の教育計画の中に見いだされたものです。だから、1年や2年ではないのですが、1つの実践の中にたくさんの学びがあつて、これが年齢を超え

て、また明日、楽しくやってみよう、あの子と会うのが楽しいなっていう、そういう形につながっていくっていうのです。

これは、子どもの前では、みんな同じです。子どもの最善の利益が語る。たった 1 つ必要なのは、自分が言いたいことは、参加者に分かるような言葉で。「これね、去年もやってきたのよ。この園の歴史だから」みたいな、こういうのは駄目。私が、何で心を動かされたのか話したらみんなのものになり、保育の原点となる。そして、子ども理解の学びを深める。

冒頭に言いましたけど私は、本当に「子どもがどういう経験をしたのか」っていうことが、とても大きい意味をなしているっていうふうに思っています。特に幼児期は、言葉より体を通して認知していく言葉とかが、すごく大事って思っています。

それが、なぜかっていうと、何年たつたっていじめが無くならない。小学生に「いじめはいいか悪いか」と聞いたら、「いじめはいいですよ」なんて言う子、いません。どうしたら、いじめっていうことがなくなるかと考えた時、自分の言った言葉が相手にとってどう思われるか、という他者理解の豊かさがなくならない限りなりません。大体新聞に出るときは、あの子たちって、「遊びの途中だった」とか、「殺すつもりはなかった」って言いますよね。でも、幼児期だったら、自分が言った言葉で、相手が表情「うん？」って変えたら、他者理解の高い子どもたちは、それは本当に「ああ。」って気が付くんですよ。大体、3 歳児から 4 歳児ぐらいの保育がすごく大事で、そういう意味でも、保育を経験と勘にするのではなく、今の子どもたちが何を考え、家庭環境も厳しい、子育て状況厳しいの中で、現実の子どもを捉えて、そして、楽しい保育をつくるっていう実践を、今始めて 4 年目です。

この研究方法を 4 年間やって、たった 1 つ見いだしたのは、うちの園というか、5 カ所ほどありますが、そこでの指導には、「共感的に関わっている」という共通性があります。子どもが不適切かなって思う行動の中にこそ、子どもの発達理解、いわゆる子どもを理解するチャンスがある。たたいた、なぐった、かんだ、来ない、ひっくり返ってるっていう姿を「悪いことしてる」っていうのか「今、困ってるんだね」って思うかによって、次の保育が全然変わっちゃうんですね。

それは、どういう中でやるかっていったら、やっぱり遊び。今は遊びの質が問われています。どういう視点で、遊びをつくっていくのかっていうのが、プロの私たちです。働いて給料をもらっている私たちは、子どもに豊かな遊びをつくり出すという、そうした専門性が問われているんだろうな、っていうふうに思っています。以上です、ありがとうございます。

永倉：岡村先生、ありがとうございました。まだ聞いていたいところだなと思いながら、伺っていましたが、ひとつ伺っていいでしょうか。「ちょこっと記録」っていうのが、先ほどの報告の実践記録っていうところの、1 カ月を振り返り、自分にとってすてきだった、楽しかった実践を記録するっていう一連の活動なんですね。（うなずく）ありがとうございました。

今、「体が語る言葉」を書き留めた事例を載せてくださったんですけれども、そして、また保育も指導っていうのを体で語ったっていう、なかなかここに意味を見いだせるっていうことは難しいだろうし、それをまた評価する周りの職員っていうのもすごいなと思いながら伺ってました。

じゃあ、またちょっと全然視点が変わって、今度は御前崎市の知恵を、ちょっと伺いたいと思います。篠田先生、よろしくお願いいたします。

篠田：今日は、このような場に呼んでいただいて、永倉先生をはじめ、県立大の先生にお礼申し上げます。今日は、秋田先生をはじめ、幼児教育のこうしたスペシャリストの専門的な先生方の中で、私のような専門外の者が、このような場に立っているということに、大変緊張しております。

しかしながら、今は、お話をお聞きしながら、私にも、やっと遅い初孫が、1月に生まれそうだということがありまして、3〜4カ月で、もう保育園に預けるということですので、どの保育園に入れるかなと、研究を。今、そこが頭にありまして。こういう保育園に入れたらいいかなとか、岡村先生のところに入れてもいいとか。東京には、どういう園があるのかなって、秋田先生にお聞きしようかなと。お茶の水大のこども園に入れようかなとか、入（はい）れないんですけど、そのように考えてしまいました。失礼しました。

御前崎ですが、御前崎市は遠州灘に面しておりまして、浜岡砂丘、白亜の灯台、それからアカウミガメの産卵地と風光明媚（めいび）な大変いい所です。カツオをはじめとする海の幸、それからお茶、メロン、イチゴ、夢咲牛と、山の幸にも大変恵まれておりまして、食には、大変困りません。残念ながら、残念と言っちゃいけません、話題の浜岡原発も抱えております。

人口約3万3,000人の小規模市ですけども、3つの認定こども園、3つの幼稚園、2つの保育園、合わせて8つの公立園を持っております。で、民間保育園が1つあります。そして、5つの小学校、2つの中学校がありまして、大きく左側の御前崎地区、それから右側の浜岡地区に分かれております。さらに、県立池新田高校がありまして、この池新田高校の全校生徒の55%が御前崎市の出身者ということです。

そこで、御前崎市としては、どのようにして保育が質のみならず教育の質をどのように高めるかということについて、次の3つの視点でお話をしたいと思います。1つ目は、御前崎の教育、スクラム御前崎、2つ目は、なぜスクラムかということ。そして、3つ目は、「スクラム・スクール・プラン」の実践についてです。

まず、御前崎市の教育についてですが、郷土を愛し、未来をつくる人づくり、未来をつくる子を基本目標に掲げておりまして、スクラム御前崎と呼んでおります。これまで求められてきた生きる力の真価を計りつつ、社会の変化に柔軟に対応し、多くの他者と関わりを持ちながら、その関わりを広げ、より豊かな自己の人生と、より豊かな社会を切り開いていける力を持った子どもたちを育てたいと目指しているところです。

高い志や夢を持った子、それから、学び続ける子、他者と豊かに関わる子、社会と関わ

っていく子、この4点を未来をつくる。この視点としまして、今取り組んでいるところですが、そのために園、学校、家庭、地域、行政がスクラムを組み、社会全体で協働して人づくりをしていくことを、大きな方針といたしました。そのために、真ん中のスクラム・スクール・プランと書いてあるところですが、これを大きな方針としまして、特に、この施策を26年度より立ち上げました。

このスクラム・スクール・プラン（※ 参考資料 御前崎市「スクラム・スクール・プラン全体図」）というのは、0歳から高校までの教育において、子どもの育ちと学びをつなぎ、途切れない教育の実現を目指すものです。この高校を卒業したときに、池新田高校だけではないんですが、子どもたちが18歳で高校を卒業し、社会に出ていくときに、社会的、職業的に自立した人間として、よりよい自分の人生を切り開く人に育てたいというときに、そのためには、小中学校で身に付けておきたいことは何なのか、そのために、園ではどんな力を付けておかなければならないのか、と系統づけて考えるときに、園では、夢中で遊び込む子っていうのを目指して力を付けてほしいと願っているプランです。

逆に、園で付けた、この夢中で遊び込む子を通して付けた力というのは、どのように小中学校に引き継いでいくのか、どのように、これを高校に引き継いでいくのか。この学びと育ちをつなげていかなければならないと考えております。

それでは、なぜ、スクラム・スクール・プランを立ち上げたかということですが、私が小学校に勤めておりましたとき、高学年の教諭から、小学校で自分の意見を堂々と述べ、みんなで学習をつくっていった、この姿が、なかなか中学校の授業を見たときに見られない。これはなぜなのか。「校長先生、僕の方針は間違っておりますか」、度々言われました。私も中学校の授業を見させていただいて、本当にこれでいいのかなっていうことを、時々感じるがありました。逆に、小学校は、中学校、高校を見据えて、教科において、こうした系統的な学習を分かっているながら、小学校の教科の学習をしているか。そこも疑問ではありました。

また、中学校に送り出した子どもが、校長室に遊びに来るとかが、度々ありまして、特にあまり勉強が得意でない子ほど、校長室の窓のところへやってきまして、「中学校行ったら、さっぱり分からない、勉強が」っていうふうに言い始めました。ですが、いたずら小僧さんたちなので、「ああ、まあ、あんたたち、本当にちゃんとやってないでしょう」って。先生たちに反発してるでしょう」って言ったら、「そんなことはない。見に来いや」って。見に来いやって、それが本音だと思うんですけども、そういった言葉を聞いていたりですね。

それから、校長の校長先生と仲良くなっていると、高校でのベネッセのドリル学習をやらなければならない子がいるとか。「分数の4分の1か3分の1、どっちが大きいか」って問われたら、「4分の1って、大きい」って言う子がいるんですよ。そういう言葉を聞くことが度々です。

それから、園で3歳の入園の集いを見させていただいたときに、「おお、私に3歳の担任

ってできるかな」って、よく園長先生に言ったんですけど。「1回、やってみたいいな私」って、おこがましいことを言ってるんですけども、それが卒園式になると、見事な態度で卒園をしている。なんだ、小学校6年生と変わらないじゃないかって思ったときに、小学校が園から卒園してきた子たちを、本当に引き継いでいるのか。そういうことを、赤ちゃん扱いしていないか。そうしたことは、だんだん思うようになりました。

また、こういった立場になりまして、度々園を訪れることがありましたが、園って、子どもたちを見ていると、大変かわいいとか、楽しそうに遊んでるとかって思っていたんですけども、でも、この遊びの力が、小学校の学びに、学力にどうつながっていくんだろうか。どこを見たら、この小学校の学びにつながるんだろうかと。全く私にはよく分からなかったんです。園が悪いということじゃなくて、私が勉強不足。そういうことを考えたときに、この子どもたちの学びと育ちは、本当に園から学校へ、学校から学校へと、学力としてつながっているのか、っていうのが1つ目の課題です。

2つ目は、園長先生と仲良くなっていけますと、園って、幼稚園でも、「遅刻をしてくるうちが増えたんだよ。遠足でさえ、遅れてくる。あの楽しい遠足に遅れてくるから、門、閉めちゃいました」とかって。「いやあ、すごいことやりますね」って言って。「いや、小学校もそうですよ」っていう話と。「朝食をコーヒーだけにする」とか。「ええ、」って。そういうことを驚いたり。

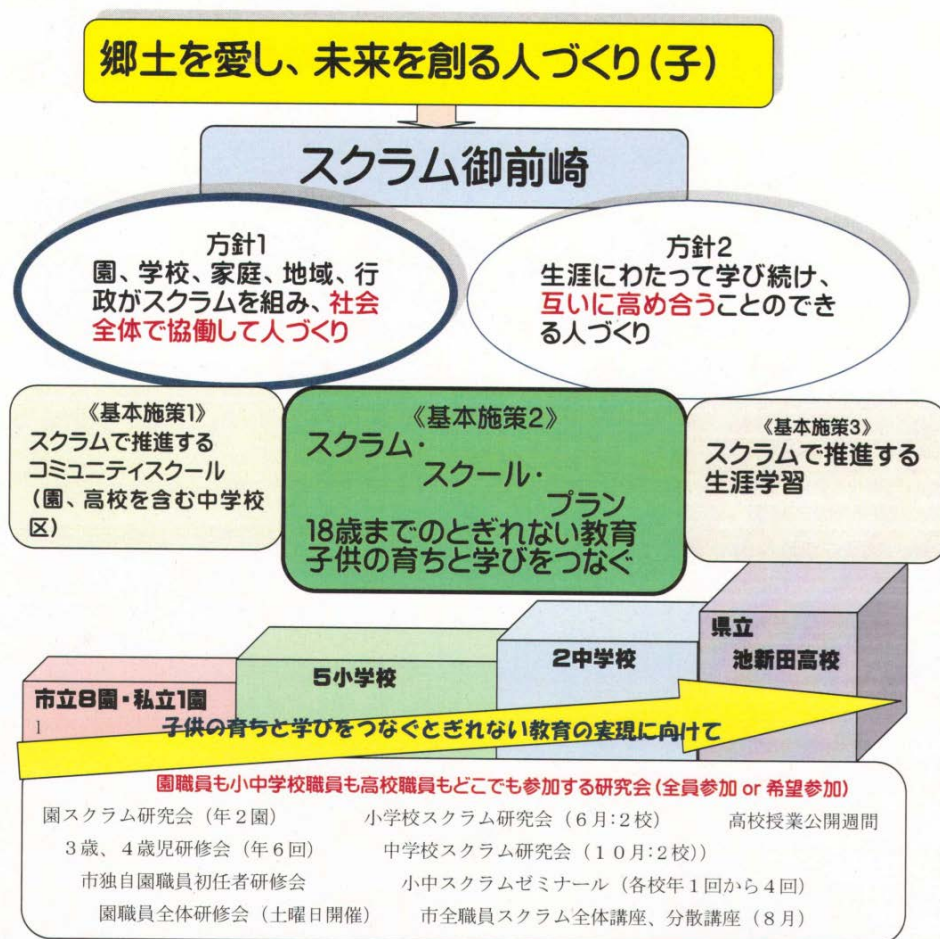
園長先生、校長先生とお話すると、近頃の、この社会的な状況、家庭環境の変化の激しい中で、愛に飢えているとか、自己肯定感が低いとか、いろいろ支援を要する子が大変増えている。高校までもでした。特に、「高校でも抱きついてくる子がいますよ」っていうのを聞いて。やっぱりこれは、園から学校から、今、課題を共有していかないと、本当にさまざまなことが、今は、子どもたちの中で起こっていることを、いかに共有していくかということが大事であろうと考えたわけです。

もう一つは、主な理由の1つとして、これは大変失礼になってしまうかもしれないんですが、私は3年半に、この教育長という職になります。一番最初、園長会にも出るんですよって言われて、訳も分からず園長会に出ました。何を言えばいいの、何を言ったらいいの、よく分からないまま行っただんですけども、御前崎市は浜岡町時代から保育園と幼稚園の人事交流が盛んになされておりまして。本当にすばらしいことだと思います。

そういった歴史の中で、園長会に参加したんですが、パッと入った雰囲気、保育園部と幼稚園部と、園長先生たち、ちょっと空気に溝がある。なんて、失礼ですね、今、そこにも園長先生、いらっしゃるので、申し訳ありません。親しい園長先生には、すぐ申しました。「ね、溝がありませんか」って。なんか空気に溝がある。

保育園は、とても忙しくて、「こんな研修なんかやってる場合ではないかな」とか、小さい声で言いました。そういう、幼稚園は、「もっと研修が必要だ」とか。なんか、なんかこう空気に溝がありまして、急いで席を替えました。「保育園と幼稚園とくっついて座ってくださいよ」っていうふうにして。

そうしたことから、教育課題の、園も学校も地域も行政も家庭も、みんなで受け止めて、そして共有して、同じ方向を向いて、取り組む必要があるじゃないか。特に園と学校は、どういう人づくりをしていくのか、どういう力を付けていくのか。子ども観、授業観を共有していかなければ、学びと育ちはつながらない。点で終わってしまわないかっていうことを感じましたので、スクラム・スクール・プランを立ち上げました。



それでは、このスクラム・スクール・プランとは、ということですが、公開保育研究会、授業研究会を通して、園、小中学校、高校の教職員が、御前崎の人づくりを担う同志として、仲間意識を持つこと、そして、互いの指導力の向上を図ることと思っています。

まず、園の公開保育研究会なんですが、公開保育と事後研ですが、園のスクラム研究会、歳児別研修会、市独自の初任者研修会。園職員の全体研修会と主なものを置きました。園のスクラム研究会って一番上なんですけれども、こちらには年に2園、幼稚園、保育園、1園ずつ、小中学校の教員も参加します。さらに民間の保育園って、先ほど、1園ありましたが、この保育園の先生方も参加いたします。

そして、大きなこととして、これまで御前崎市は12年間にわたり、上智大学の奈須先生から、授業についてのご指導を受けてまいりました。奈須先生といろいろお話する中で

「私、全然園のこと、分かんないんですけどね、こうやって、これ、園ってどうやって見ればいいんですかね。一回見てもらえませんか」って、から始まって、昨年から奈須先生に見ていただくことになりました。

奈須先生が小、中、園を通して見ていただくことによって、園の先生方におっしゃったことが、「今こそ、幼児教育っていうのは最も重要なんです。皆さん、誇りを持ってくださいよ」と、園のかたがたに語り掛けたわけです。私も本当に奈須先生から、いろいろなその園の見方っていうのを教わりまして、大変勉強になっています。

さらに歳児別研修会、3歳児と4歳児、年に各園3名ずつ、県立大のここにいらっしゃる永倉先生に大変お世話になっておりまして、じっくりと見ていただいております。さらに、保育園部、こども園部の乳児部の1年目から3年目の職員は、県の初任者研修を受けることができませんので、今日も来ていらっしゃる退職された園の園長先生方をお願いしまして、年に4回ずつ、市独自の初任者研修を行っていただいております。

それから、保育園の先生方も参加できる園の職員全体研修会っていうのも行ってまして、こうしたことが園のほうで行ってることですが、この小中学校の授業研究会、これもスクラムで行っておりまして、中学校の、先ほど申し上げました2つの中学校には小中学校の職員、それから、先ほどの池新田高校の職員が、午後の授業カットをしまして、全て参加すると、大変校長先生のご理解の下で、各園も都合を付けて参加して下さっております。これは授業を見て、その後事後研も行うもんですから、小中学校と高校と園の先生方とそろって授業についてのみならず、今の子どもたちの様子とか課題とか、これからのこととか、そういうことを話し合うことができます。

また、小学校においても、年に2回、スクラム研究会。ここにも、幼稚園、高校、小中学校が参加いたします。それから、小中学校で各学校で行うスクラム・ゼミナールというのがあるんですが、これも自由参加です。それから、スクラム全体講座、園の先生方は、先ほどの園全体研修会とは別に、小中高の先生方と一緒に全体講座を行いまして、今年は人間関係プログラム作りについて学びました。

さらに分散講座というのがありまして、これは、もう海のマリンスポーツをやったり、外国語をやったり、食育をやったりするんですが、ここにも希望参加を、園の先生方、していただきまして、小中学校の先生方と仲良くなると。そういうことができればと思っています。

次に、御前崎市では、コミュニティースクールを御前崎型コミュニティースクールと呼んでおりまして、中学校区で園から高校までを指定しております。園や学校の抱える課題を、年6回家庭や地域と共に対策を考えていくことをしているんですが、なかなか進まないんですけども、やっとスクラムグッドマナーあいさつ運動っていうのが、中学生の発案でなったときに、運営協議会、私もいつも参加させていただくんですけども、保育園のPTAの会長さんが、本当にいいこと言うなあって。

保育園のかたがたも、保育園ですから、保護者同士仲がいいと思っていたら、そうでは

なかったと。やっぱり、あいさつのこと、運動することで、交代で立つことで、知らなかったお母さんと声を掛けることができた。私は保育園の中は、もっと保護者同士、知り合いなんだかと思ったら、そうではなかったと。そんなことが分かりまして、これからも、こうした運営協議会で話し合っていくこと。

また、中学校の実態を聞きまして、保育園、幼稚園の PTA の会長さんたちが中学校の校長先生を、園の保護者会に呼び、園の実態を話してもらおうと。そういったことも行われるようになってきました。

最後に、これまでのスクラムの成果と課題ですが、幼稚園も保育園もこども園も、研修意識が高まってきているっていうのは、大変うれしいことです。特に、初任者研修に入られてる先生方、あるいは、永倉先生方からも、「若い先生方が伸びていますよ。」とか、「若い先生方が、事後研修において、本当によく話し合いをしている。よく、あれだけ声が出ますね。」それが大変うれしいことでもあります。

子どもたちの遠い将来を見通して、「今、何をすべきか」という意識を持てたというのは、実は先ほどの中学校のスクラム研修会などのアンケートで、1年目2年目の園の先生ですが、このような感想を持ちました。園から高校までつながっている、それが分かった。だから、私は幼稚園の専門性を自分としては高めなければならない。園は学習とはほど遠いと思っていたが、生活習慣とつながっていることが分かった。もっと、そこの部分を大切にしていかなければならない。また、ベテランの先生からは、「高校卒業までの育ちを見通した話をしていく中で、子どもたちをどう育てるべきか。社会に出たとき、親になったとき、これから長い目標を見据えて子どもを育てていかなければならない」。こうしたことが、園の先生方のみならず、小中学校の先生方からも、こうした感想が出ていることが、1つの成果ではあるかなと思います。

課題ですが、やはり子どもたちが本当に遊び込み、質の高い遊びや、質の高い生活そのものを、どのように作り出していくかということには、これ、今後、まだ課題があるかなと思っています。

奈須先生からは、「乳幼児は、遊びそのものが生活なんですよ。生活をつくり出していく子どもたちをつくらなければねえ」って、いつも言われております。また、今後も学びを、どのようにして、園から学校、学校から学校へ引き継いでいくか。学校の中でも、小学校は1年から6年まであるわけですから、その中で、どう引き継いでいくか。それも課題ではあります。

最後に、家庭や地域をもっともっと巻き込む必要があると考えております。以上です。ありがとうございました。

永倉：篠田先生ありがとうございました。篠田先生に初めて会ったときに、今、御前崎はこんなふうに研修やってるんですけども、一番始めのお言葉が、「遊びが大事だって、保育っていうけど、遊んでないじゃないですか」って、先ほど、外の目、っていう、秋田先生がお話しされましたけれども、保育者が遊びを「やってるやってる」と思っても、本当

にそれが遊んでるのかっていうのを自分自身で考えないで、こんなもんかって、割と惰性でやってしまうところもあるのかということを、ずばっと言ってくださったんじゃないかな、というふうに思いました。

それから、先ほど、保幼小中高がつながってることが分かった、っていう言葉ですけども、保育者は未来をつくる仕事っていわれますけれども、そういう、本当にそういう実感っていうのがなくて、なんか、今の時間を、ただ、皆さんが困らないようにフォローしてるようなところばかりが、なんか最近言われるので、そういうところを、やっぱり感じることができたっていうの、すばらしいなあというふうに思いながら、今、伺っていました。ありがとうございました。

————— 15分休憩 質問用紙に質問を記入 —————

永倉：お待たせしました。司会者の役割ってというのは、これをまとめていかなくちやいけないんですけど、今、大量に皆さんが書いてくださった質問が、見事に様々なものですから、今ちょっと私は人生で一番の危機に陥っております。それで、その中には、午前の話から、今までのシンポジストの話の中でも、答えが、随分語られていたものもありますけれども、ちょっと切り口を変えて、地域とか家庭ってということとつながるってということについての質問が幾つかありましたので、ちょっとそのところについて、話を始めていきたいと思います。

今まで、記録の取り方とか質が高いってということについて、残していくとか伝えていくとかっていうことは、とても大事なことなんだけれども、その一番重要なところってというのは、家庭の子どもが親にちゃんと理解をしてもらうってということなのかな、というふうに思うんですが、こんなふうな質問があります。「子どもの将来のため、未来のためと思って、教育をしても、子どもの今しか見てない保護者には、どのように対応したらいいんでしょうか」。「今回、家庭を巻き込んでいくことが大切と聞いたんだけど、なかなかうまくいかない。安易に子どもを休ませてしまうということもあったりして、子どものための保育ってというのは、なかなかしにくいんだけど、この辺については、どういうふうにしていけばいいんでしょうか」

いろいろな園の役割っていうのがありますので、一言では言えないと思うんですけども、先ほど、宮里先生から、保育者主導の保育から脱却のチャンス、今は、っていうことがありましたので、それぞれの先生方が、親とつながるということで、どんなチャンスっていうのを、ピンチをチャンスに変えたご経験があるのか、ちょっとその辺をお伺いしたいと思います。じゃ、宮里先生、お願いします。

宮里：永倉先生のピンチを救うためにつけてわけではないんですが、じゃあ、ちょっと言っていきたいと思います。

保護者とのことは、とっても大事だなと思っています。それは、どのときもそうなんですけど、こども園になった場合に、本当に多様な状況を抱えている保護者がいる。それぞれの方が、でも、必ず関心を持ってほしいっていうふうに思っています。ですから、便りを出したり、掲示をしたり、あるいは語り掛けをしたり、保護者会をしたりしています。

その中で、最近、2つ心に残っていることがあって、1つは、朝、どうしても家で食べられない子が、玄関の中の角で食べてても、完全に目立つんですが、そこで最後の1口食べてるって。でも、それを食べ終わったら、お母さん行けるんだけど、お母さん、だんだんすごく大変そうになってくるので、そういう状況をどうしようかって話したときに、とにかくいろんな状況の方がいて、「最後の1口、そこ、喉詰まらせても困るから、じゃあこっちで食べたら」っていうふうな話を最近したっていうことがありました。

だんだん、おうちでしっかりとした時間に起きて、ご飯をおうちで食べてこれたらいいんだけど、そうじゃないときに園として何がお手伝いできるかなっていうことは、きっとあるんだろうって思ったことです。

あと、もう1つは、今まで、幼稚園のときは、遠足に行くと、遠足から帰ってきたら、「ゆっくりおうちで休んでね」なんて言いながら、さよならってしたんですが、自分は、何事も、その場に立ち会わないと、その状況が理解できない、本当にそういう園長なんですが。あるとき、とってもいい遠足を、春に、4歳がして、園に帰ってきたら、1号のお子さんは、そこから帰るんですけども、2号のお子さんたちは、その後、ちょっと休んだ後、おやつを食べて。そのとき、私から見ても、その子たちがだんだん疲れてきて、機嫌が悪くなったり、なんかそうだったんですよ。あと、先生たちも、ちょっと疲れてきて。もちろん、休憩は取るんですが。そうか、きついなあって、そのとき思いました。

で、考えました。その日に、保護者の方に休暇を取ってくださいとは、もちろん言いません。でも、保護者会のときに、一生懸命話してみました、「子どもたち、とってもいい遠足でした。その後に、やっぱり少し疲れていたりする。園でも、もちろん休息を十分取るようにしますが、遠足の日はお迎えが、少し早めにできる方はしていただいたり、あるいは、夕ご飯が、少し楽な食べ物にしたりして、子どもが疲れてるってことを思いながら迎えてくれるといいです」って話しました。

次に秋の遠足のときは、もう1回経験すると、2回目は工夫する園ですからね。最初から工夫できないんです。事態が分からないので。取り越し苦労はしないんですが、まずいと思うと、次は少し努力するので、次はもうしっかり昼寝もしたし、先生たちも上手にやりながら、くつろぐ。あんまり問題なかったんですが、その日、若干早くお迎えに来てくれた方が、1人か2人いたような気がします。登校園名簿でチェックしようと思いましたが、あっ伝わったかなって思うんです。

権利としては、預けていただいて構わないんです。それは全く問題がない。だけど、お子さんにとっては、っていうことを考えてみてください、っていう問い掛けは、実は、自分も3人の子どもを保育園で育てて、遠足の後とか、小学校以降のときにも、そういうとき、自分、早めに帰ったかって、いまさら取り返しがつかない過去を悔いているんですが、もしかしたら、そうやって学校のことが大変なときっていうのは、少しでも家でフォローするよって思う、そういうメッセージが伝わったらいいなって思います。

何か、やっぱり子どもを中心に置くっていう中で、でも、保護者の方も、一生懸命なんだっていう辺りに思いを寄せながら、このことは発信しよう、子どもをちゃんと育てたいってことに対して、プライドを持っている私たちだから、発信しよう。それを聞ける心を持っている保護者なんだと思って信じながら、というか、そういうふうに思いながら。だけど、思ってもやれないんです。忙しかったり、いろんな抱え。そうだよって、分かりながら発信しよう、なんて思ったことがありました。

永倉：ありがとうございました。先ほども、宮里先生が、どうしようと思ったら、子どもに聞くっていうことをおっしゃってましたけれども、やはり、子どもを信頼してるし、保護者も、いろんな方がいるのは、もう当然なんですけれども、それを切り分けてしまうのではなくて、自分のほうの見方で見ちゃうのではなくて、1回信頼してみるっていうこと

は、すごく必要なんだと、今聞きながら思いました。岡村先生は、その辺、いかがでしょう。

岡村：基本的には、多分、宮里先生と同じだと思います。その上で、私は、今の現状は、親の子育ち環境、子育て論と、子どもを育てる環境が非常に厳しい。一言で言えば、孤立化、孤独化が進んでいるのがベース。

保育園に入れて、一番最初に、私も小規模やって悩んだ時は、発熱したときです。こちらは、もう 7 度 5 分を超え、もうぐったりしてるから迎えに来ていただきたい。でも、向こうは突然言われても、それはできないんですよね。で、今どうやってるかっていうと、朝の状態なんかをつかんだ上で、午前中の途中で、一応情報を入れる。お電話入れて、「今、こういうことなんだ。今様子見てるけど、もしかしたらね」、みたいに。働いてる側も、心の準備として、「もしかしたら電話があるかもしれない」みたいな準備をする。

もう 1 つは、いわゆる保育者の子どもを中心に考える考え方と、嫁姑の中にいる旦那は帰ってこないという厳しい状況の中にいる人が、7 時半ぐらいにおうちに着いて、早く寝かせてお風呂入れようって。それは、なかなか苦労かなと。その悩んでるところを親につぶやいていただきます。

ちょっとノートに「うちの子、寝かしつけで困ってるの」って言うと、先生たちが園全体のお便りに、「何々組さんの何さんが、こういうことで悩んでいます」って書きます。それを読んだ人で「自分は〇〇した」という知恵をノートに書いていただき、お便りでもします。子育ての知恵を、いわゆる保育園というところを中心に、みんなで子育ての知恵を挙げるように。で、それは翌年になれば、「去年こんな知恵があったよ」っていって投げ掛けながら。

つまり、「保育者が言っておうちで実現すること」と、「家庭にある、下の子がいる、生まれたばかりの子いる、お兄ちゃん勉強しないという中での知恵」は、少し違い、保育者が言う言葉よりは、たぶんママたち、パパたちが作り出した言葉の方が、近いだろうと。子どもをちゃんと、早く寝かしたいっていう、そういうパパやママたちの願いは同じだっていうところを信頼して。今、うちの園では、そういう形で「親たちの交流」という、たぶん子育ての知恵袋みたいなのが流行っています。

永倉：知恵袋っていうのは、例えば？

岡村：そういう具合が悪いときって、つぶやきますよね。「寝かしつけたい」「断乳とか、トイレトレーニングに、今、悩んでるんです」って。「お宅はどう？」みたいな。それを出していただいて。それをコピーして貼り付けて、何々ちゃんは。このことによって、どんぴしゃになったとき、親のつながりが、また深まってくんですね、親たちで。ああ、あのときの考えを聞いてやったら良かったよとか。で、まだ全然変わってませんって。まだ他にありませんかって。で、そうして、子育ての知恵を、やっぱりみんなで共有して、子育ての仲間を、園を通して、親たちが力を付けていくっていうような活動をしています。

永倉：なるほど。保育もそうなんですけれども、個別対応になっていくと、お互いにどう

しているか分からないけども、東京都市大学の小川清美さんのやった大学内の子育て支援センター「ぴっぴ」でそうだったんですけど、他の人がどんな子育てしてるかを見ると、「あんな程度でいいんだ」って安心する。「あんな程度でいい」っていうのは、失礼な言い方ですけど、「私すごく駄目と思ってたけど、あれでいいなら、まあいいか」って思える。それがすごく重要だっていうことを聞いたことがあるんです。秋田先生、お願いします。

秋田：2点なんですけれども、1つは園でできることと養成校や大学だからできることがあるって思っておりまして、私のセンターでは、今、幾つかの企業に出掛けまして、お子さんがおられるかたがたに、子育て親塾っていうのをやってるんです。それは、1時間だけ、2カ月に1回ぐらい集まっていたくんですけれど、びっくりしたのは、両立で頑張ろうと思ってるお母さんが多いと思ったら、違うんです。3分の2以上お父さんです。要するに、園はいろんなお仕事の方が集まって支援されると思うんですけど、同じ会社に勤めてて、先輩とか、みんなお父さんも、今、結構手伝いたいと思うけど、そんな暇はないとか、同じ会社の悩みってあるんです。

それを、今、悩みだけじゃなくって、こんなふうにワーク・ライフ・バランスって一般にいわれるけど、それにはスピルオーバー効果とか、お互いが夫婦関係が良くなると、ワーク・ライフ・バランスもうまくいくとか、幾つか、その理論というのがあるので、そういうのをご説明しながら、それで、お父さんの悩みなり、から、これから父親になる人とか、いろんなグループで語り合ってもらうんです。もちろん、女性も入るんですけど。

そうすると、結構、やっぱり数年先輩、同じ会社で、これからキャリアを積んで、こうやって勤めていけば、今大変だけど、大体うまい手拔きの仕方とか、いい加減な手加減の抜き方とか、みんな、そんな立派なことは話されないんですが、どうやって手を抜くとか、誰に助けてもらうとか、そういう話がたくさん出ます。

私は、それはそれで、園がやるべきお子さんとのつなぎと、それから、親が親なので、逆にちょっと離れるので話しやすいとか、同じ会社だから、同じ職場でこれからやっていくから語りやすいっていうのがあるんだと、今、幾つかパイロットをやっているとして、そのうち、全国展開できるように、今はしているんですけども。驚いたのは、そういうところには、お父さんは、今、物理的にできないんだけど、せめて日曜日やってるとか。自分はやってるつもりなのに、女房はもっとやれって言うとか。本音がいろいろ出ながら、その間の調整なんかを、ちょっと先輩が話をしてくれたりしています。私は、こういうことって、各都道府県に養成校があったり、養成だけじゃなくて、そういう方たちが、さまざまなやっぱり子育ての支援のあり方っていうことを考えていく1つにはなるのかなと思っています。

もう1つは、今、伺いながら思った、さっきお見せした、「写真を貼るのもいいんだけど、具体物が出ると、親が違いますよ」という園が、この頃、振り返りをして「私たちは、随分園からいろんなメッセージを出してるけど、親から子どもの個別の連絡帳はもらってるけれど、どれだけ親から、もっと楽しい情報とか工夫とか悩みを聞けるだろうか」って

いう意見が出たんです。

研修のときに、「そういえば、あるお母さんが、この頃、うちの子が、こういうことで子どもとトラブルって、どう対応したらいいか困ってるとか、今、こんなことで心配とかって、言われて相談することあるんだけど、こういうのを個別に親とするだけじゃなくって、何らかの形で、誰々さんって言わないけど、これぐらいの時期って、こんなことあるんですよって、情報発信を私たちがすることも大事だね」って。これまで、園であったことを、ともかくお伝えするっていうスタンスだったんだけど、親御さんは、今、ご家庭でも困ったりすることもあるので、っていうことで、少しずつ、そんなことを始めたりしています。

また、私のところで、ある研究会で、『10月の園便り』っていうのを全て、かなりの園のを集めまして、例えば、要するに運動会シーズン、園は運動会を親御さんにどう伝えるのかっていうのを見ると、本当にはっきり指示型で、こう何をしろっていうのだけは書いている園と、私たちは、何のために、どういうことを育てたいから、だから、これはこうしてくださいねとか、お伝えしている園がある。やっぱり、その辺の語りっていうのも、結構、やっぱり親御さん、同じように来られるんですけど、行事。随分違うよねっという、いずれ、そのうち、論文になると思いますが、園便り分析っていうのを、各園の運動会誌だけを集めてみたら、随分いろいろありました。

永倉：なるほど。ありがとうございました。ちょっと場所が後ろで申し訳ないんですけども。今、伺いながら、指示を出すようなお手紙があったりっていうようなことでは、保育指示の中にパートナーシップという言葉があるじゃないですか。パートナーシップって、横並びだと思うんですけども。保育をしてる人は、どうしても、やっぱり下からちゃんと支援してるっていう気持ちではいるんですけども、意外なところで、指示になれば、やっぱり受け取ったほうは、強制されちゃったっていうふうに見えることっていうの、あるかもしれないので、その辺を、ちょっと今までのやってきたものを、外の目で見るとっていうのも、1つの方法かなというふうに思いました。

あと、親から出たものを、やっぱりつなげていくを、保育をつなげるのと同じで、やっぱり大事な保育者の役割なんだなっていうふうに、今、両方のお話を聞いてて思ったんですけども。ここにも行政の方たちもたくさんいますので、先ほどの子育て親塾みたいなのは、ともすると、そういうのをやってます、で終わっちゃいそうなんですけれども、保育者がどういうことで困っているか、とかっていうことを聞き取って、それで、本当に意味のあるものを、静岡でもつくれると、とてもいいんじゃないか。そうすると、そういう支援があると、少し、また保育の場が、違う色合いになってくるかなっていうふうな気もいたしました。ありがとうございます。

先ほど、篠田先生が、高校生でも抱きついてくる子がいるっていう、ちょっと衝撃的な話、そういうことも率直に語られている御前崎市なんだな、と思ったんですけども。そういういろいろな教育の段階の先生たちと語る中で、親について、何か、それぞれが困っ

てることとか、それぞれがやってあげなくちゃと思ってることについて、もう 1 回、改めて教えていただけますでしょうか。

篠田：ちょっと難しいなと思いながら、どのようにお答えしたらいいかなって思ったんですけども。先ほどの地域協議会、スクラム運営協議会、全く文科省のこととは、少し変えて御前崎市の子どもたちの実態とか課題を探りながら、みんなで考えていきたいと思いますという下に、始めているんですけどもね。それをやる中で、なかなか本音を言うのが、回数を重ねて、だんだん言ってきたんですが。その中で、やはり保護者の方っていうのは、いろいろなことを思っているんじゃないかっていうのを、時々感じる時があります。

前回も、中学校の PTA の男の会長さんが、最後にこういうふうにおっしゃったんですね、「今から言うことは、先生方、校長先生方、園長先生方はお聞きにならないでください。これは、PTA の会長さんたちに言いますから、僕が言うことは、今からは、学校の先生方は、どうぞ聞かないでください」。何をおっしゃるのかなと思いましたら、「これ以上、学校の先生方はこれだけ努力してるから、今から僕たちがやることは、ラインでもメールでも、なんでもいいから、この運営協議会のことを発信してください。会長さんから発信してください」って、そういうことをおっしゃられたんですね。

びっくりしてしまいまして、その後もその方と話したんですが。やっぱり父親が PTA に参加するっていうのは、役員でもならないと学校とか園に参加しないっていうことを、言っていました。「運動会とか、そういうのは割合見に来るんだけど、学校とか園のことと違って、本当に知るには、役員になって、初めて分かることが多いんですよ」って。

「初めて、そういう学校とつながってきますよ」って聞いたときに、やっぱ、先ほどの秋田先生の言われた子育て親塾、私も、これ、御前崎で立ち上げたいなっていうのは、ずっと思ってた。話し合うだけ、あるいは、いろいろな年間何回かやる中で、例えば秋田先生に来ていただいて、話し合ったことを感想を述べる会もあったりとか。いろんな脳の話をしていただいて感想を述べる会もあったりとか。から、食育について話したら、そんなうまくいかないんだよね、とかっていう、そういう弱音を吐ける会を、できたらいいかなと思ってるんですが。

とにかく小学校の懇談会とか、園の懇談会はよく分かんないんですけども、私も反省してるんですが、懇談会が、本当に懇談会というか、そういうものになっているかっていう、もっともっと工夫をしていく必要があるかなっていうふうに思うんですが。お答えになっているようでならないようで、申し訳ありません。

永倉：大変、ヒントを頂いたかなと思うんですけども、今、新しい保育っていうのが生まれてきて、それこそ、小規模園っていうのは 19 名ぐらいの保護者なわけよね。だけれども、そこにいる保育者っていうのは、300 人ぐらいの保護者を相手にしていたときと同じような方法で親と向かい合おうとしてるのではないかと、今聞きながら思いました。懇談会っていうのは、懇談しているんだろうかっていう。

これからますます小子化になったり、いろいろな形の保育が生まれてきて、いろいろな

人たちが交じり合って話し合う中で、自分たちが、今日、どの先生もおっしゃったと思いますけれども、今の状況をピンチと思うんじゃないくて、新しくつくっていきこうっていうことが大切で、今日のお話にいっぱいそのヒントがあったと思うんですけども、それぞれの園に合ったものを、何かつくるっていうことを企図していったらいかがだろうかと、聞きながら、口幅ったいですけど、思ったことです。

今、親のことも聞いてみたんですけども、時間が、もうあと少ししかない中で、もう1つ、どうしても聞きたいなと思うのは、「親を育てる」ということや「次世代の保育所を育てる」ということです。研修の話もたくさん出ましたけれども、岡村先生、「ちょこつと記録」って、ちょこつとっていう言い方が、とってもいいなと思ったんですけども、何か気楽に、忌憚（きたん）なく自分たちの話ができるような、先ほども「席を交ぜちゃいました」という篠田先生の話もありましたけれども、なんかそういう小さな時間とか小さな結び付きとかを活用するようなことができないかと。親ともそうでしたけれども、保育者同士のそういう研修みたいな形っていうのは、何か、いいアイデアというはありますでしょうか。宮里先生いかがでしょうか。

宮里：私は知らないってことで。そんないい役割をいただいて、それに、この件に関して、ちょっとそんな簡単には答えられないんです。というのは、いや、いろいろ、今工夫しているところです。

うまく言えませんが、ちょっとそっちの話に行く前に、先ほど私が、遠足の後、子どもが荒れますよねって言ったら、前から2列目の先生が、にこにことうなずいてくださると、すごくうれしいんです。ていうのは、私たちは、そういう子どもが見えてることなんです。そういうふうな状況なんだよね、までは共通に思うんです。そこからどうしようかっていうので、困ったと思ったり、知恵を出し合っているんですよね。

だから、私は、今とにかく言いたいのは、この4月からこども園という場所で過ごすようになって、その1つ、研修っていうことでも、この前まででしたら、3時ぐらいから、なんて簡単に言っていたのが、本当に最初の4月、朝、「おはようございます」とって、幼稚園だったとき、みんな職員室、そろうんですが、あれ、3人、みたいな。なんか私の中のけじめがつきません、みたいなところからスタートしているので。

それが8カ月過ぎますと、本当に、今この時間、今集まれるとか、昨日も幼児クラス、来年に12月いっぱいの打ち合わせを、3時45分から4時45分っていう、ちょうどおやつ後のその後の遊びのところに、人に付いてもらいながら5人でやれたんですね。そんなことは4月の初めには想像もつきませんでした、立ち上げだったってこともあるので。だから、時間は工夫していけるし。で、気が付くと保育をしながら「あの子の遊びと、あの子の遊びが、こうつながったね」とって。保育の物語みたいなのを、ちょっと語ってる保育者がいると、「ちょっとすごくない？」って寄り添うんですが、それも一瞬で消えていくんですね。だから、まだうちの園では、こういうふうにして実績を上げてますとは言えないんですけども、方法はあるなと思っています。

今日は、私も本当に午前中は学ぶ感じで、さっきは岡村先生の親による交流って、あのとき、私も手挙げて、「もうちょっと具体的に、それ、どうやって交流するんですか」とか、「ホワイトボードに貼るんですか」とか、聞いたかったぐらい、やっぱ工夫なんだろうと思うんですね。だから、今日は幾つかもらったアイデアをやってみようって思うし、そのさっきの「ちょこっと記録」の、先ほど細かく出してくださったポイントを生かしながら、また園で提案してみようと思うんですが。本当に、だからこの件に関しては、皆さんと同じように、今手探りでやっています。

ただ、もう 1 個だけ言えば、私は質の話が出たときに、秋田先生はそういうふうにおっしゃってないんですが、何か評価されるように、質という言葉が出ると、すごく落ち着かなくなったんですね。なんか、「じゃ高めなきゃ」みたいな。そうではなく、私たち自身が高めたいっていうか、やっぱり 4 月いっぱい、そうやって話し合う時間が、あんまり取れなかったときに、新設園に意欲を持って来てくださった先生方のどなたかが、「これじゃあね」って、なんかちょっとがっかりした感じがあったんです。あるいは、ちょっと疲れてきちゃってる。何によって疲れたんだろうって思うと、自分たちの保育の中のちょっとした疑問とか、あるいは良かったこととか、そういうことを落ち着いて話す時間が、本当に取れなかったんです、4 月。

そんな中で、ちょっとずつ保育は、何とかみんなの持ってる力で乗り切れていくし。実はいい保育をしているんですけども、ある誇りみたいなものが、だんだん下がっていったら。それが一番良くないなと思って、研修の機会が必要だとか、そんなふうな題目というよりは、私たち自身の誇りやモチベーションを上げる上で、「保育を語る時間」それが本当に大事だなと思って、今、悪戦苦闘しているのです。もしも再来年ごろに、皆さんともしお会いする機会があったら、幾つかの効果的な方法をお話しできるかなと思っています。

永倉：ありがとうございました。模索について語っていただく中で、ヒントがあったかなと思います。やっぱり保育者っていうのは、子どものことを語ったり、保育のことを語るのが楽しくなかったら、続いていけないと思うんですね。そういう中で、先ほどの岡村先生の「もっとやりたい研修」ってすごいと思います。普通やりたくないですよ、あんまり。時間取られるし、「時間が細切れでできるわけがないじゃない」とか、「今日宿題もらっちゃったから、やってこなくちゃいけないけど、月曜までに」とかっていう声が、よく聞こえる中で、「やりたいから、もっとやらせてください」という珍しい言葉を聞けたと思いました。ちょっとその辺について、もう少し、先生、お話しいただけますか。

岡村：それは多分保育者が、子どものすてきさをいっぱい発見しちゃったからなんだろうなっていうのが、私的には思っています。で、好きな一番心を動かしたところを書くってことは、ある種、1 年目も何年目も、それは自信があるところですよ、その人なりに。客観的にとか、そういうのは関係なく。そこから、つまりたった部分の 1 枚なんですよ、25 日ぐらいの保育日数のうちの。でも、これは、その全体が見えてくるっていう研修会になってます。

私は、この平島幼稚園に行って、一番最初にやったのは、保育で語るっていう「職場づくり」でした。何をやったかっていうと、クラスごとにやっていた掃除をやめ、一つのクラスから全員で掃除をしながら、「今日はああだったよ、あんなこともあったよ」っていう、そういう子どもで語るっていうのを、まず大事にして、その日早くに悩みとかなんかは解決する。今ここで言ってるのは、まさしく学習のみです。来月の月案どうするとか総括とか、そういうのは一切ないです。

これは、本当にこのレポートの中で学ぶ。で、ここから生み出されたのは、保育者が楽しいときって、楽しい保育が生まれるっていう、それはもう実感として、それはさっき言ったように、共感的に関わるっていう中で、保育は子どもとつくるって私は思っていて、大人の願いの計画通りはあるんですよ。でも、それを投げ掛けたら、子どもが乗らなかったって。そうしたら、子どもたちの心に火はつかない。じゃあ私はこれをみんなで楽しみたい、楽しませてあげたいなと思ったら、どう指導を作るかっていうのは自分に振り返ってきますよね、子どもが悪いんじゃないくて。で、それは保育力が上がるって。

今これから12月で、皆さんはどんなクリスマスを保育実践なされるか分からないんですけど、うちは一番最初に（でも、今年は年長さん、入っちゃったんですが。）例えばサンタさんから手紙が来る、1週間ぐらい前。フィンランド語とローマ字で。「私、フィンランド語を知ってるわ。何、幼稚園がもう閉まっちゃうから、あと何日しか来ない。で、目印が分からない」って言うと、子どもが考えて、「部屋を飾ろう。」そういうときに、今まで飾ったことない輪飾りではなく、発達課題にあった指先でいうと四つ編みでリースを作るとか、年少さんが散歩に行った木のつるを作って、年齢発達で部屋を飾り始めるんです

2年ぐらい前のときには、「きっとトナカイがやってくるに違いない。だから、園から帰った子が、トナカイの、（食べるか分からないですよ、）ニンジンを持ってきたり、園庭のクローバーを摘んで。ケーキもサンタさんにあげよう。」もちろん1ピースだけ置いて、残りは作った子どもたちで食べて、次の朝来ると、食べてあるわけですよ、散らかして。誰が食べたかは、もう分かっているんですが、子どもは、この世界を見て、「すごい、サンタさんがいるの」って。結果としては、いろんな子もいますけど、1週間ぐらいの中に、サンタさんが来る、サンタさんが来るっていう中で、そういう課題に取り組み、ええって思ったぐらいの、今まで思ったことのないような飾りをしようとか、こうしようとかって。

だから、保育実践は、投げ掛けた保育者側の超えるような、ええ、ここまで出ちゃったっていったら、この保育は成功だなあと。プログラムどおりにいくより、子どもがウワッてはみ出したりやったときほど、保育は面白くなるんだなあって、こうやって保育つくってると、毎日が何かワクワクドキドキ、楽しんで保育をしていることが、保育者のスキルも上がってくって感じかなって。誰が楽しいって、みんな保育者が楽しいんですよ。

永倉: 本当に保育の原点ってそこなんだっていうことを、忘れがちなのかもしれません。「ちゃんとやらなくちゃ」とか、評価されるので、「ちゃんと記録書いてます」とかっていって書く記録は、たぶんつまらない記録なんだと思います。書かなくちゃいけないっていうの

もあるんですけども。

ですので、先生方、こちらにいらっしゃる方はベテランの先生方が多いと思うんですけども、一番最初に「子どもと向き合いたいな」と思った時の事を思い出して。先ほどの午前中の講演で、最後にこのことが出たとき、皆さんの方から、すごくいいため息のような声が聞こえてきたので、ああいう顔を見たくて、やっぱり保育ってやっている。今回の質問の中にも、「子どもが満足感を得てるっていうことを、どうしたら分かるでしょうか」という質問があったんですけども、それは、もうそういう手掛かり、自分の心が動いた手掛かりをもとに、皆さん自身で探していくんだろうと思います。

また、質問の中で、少し今の内容につなげて言えば、「記録の仕方をどうしたらいいか」ということを書かれている方が、何人かいらっしゃったんですけども、これも、決まった形っていうのはないってことで、よろしいんですかね。岡村先生のところはあんな形でやっていて、宮里先生は。

宮里：ポケットに紙と鉛筆入れて、ちょっとした、あまり子どもに迷惑掛からないときに、ポンポンって目印を書いておくと。だから、実践って「本当の実践か、自分をくぐった実践か」ということで、記録は違いますよね。同じ 2 人担任でも、記録は違ってきていいわけだから、そこを大事にして、自分の保育をしたいっていう、そういうことを大事にしていくと、なんか楽しくって、毎日園に行くのが楽しくなりますね。

永倉：「ちょこっと」と言うと、宿題っていう重さが、ちょこっと軽減されて、思いがけないさっきの柴田さんのようなことも、「本当に書いていいんですか」とっていうようなことも、出てくるんじゃないかなと思いました。ですので、この方たちに対するお答えっていうのは、「好きなように、いろいろやってみてください」ということで。それで、いい結果ができたら、ぜひここで、またシンポジストになって来ていただけると、私、いいなと思っております。いろいろ実験的にやってもらえばいいんじゃないかなと思います。秋田先生、お願いします。

秋田：はい、私、岡村先生の記録を見たときに、とても大事だと思ったのは、2 カ月目の先生の記録。私が入っている園で、その写真で本を出させてもらった保育園では、「こんなに研修って楽しくっていいんですか」とって、いろんな人に言われました。それで、私、ええって思ったんです。

要するに、ちゃんと書く記録をやったら、書けない人たちだったんだけど、写真で撮って説明付けたり語り始めたら、いくらでも書けるようになってきました。でも、その園はみんなが語りたくなったんですが、研修の時間は限られてるんです。そのときにどうしたか。そこは、園長先生や主任が偉いなと思ったんですけど、今年入った先生、今年異動しててきた先生が、「いいなあ」とってこの園で思ったり、「なんでこの園の先生たち、こんなことするんだろう」とっていう場面を記録されたり、感じたことを語ってもらってということを始めたんです。

そうすると、雰囲気、変わるんです。分かりますか。研修で、いつも大体パワーがあっ

て、発言力のある人たちがやってる研修は変わらないんです。でも、さっきの 2 カ月目の先生とか、「こういうのいいよね」とか。この間なんかびっくりしました。初めての先生が、なんかイチゴグループとかいう印のイチゴが、本物の写真がただ貼ってあっただけなんですけど、それを、「私は、今まで本物のイチゴではなく、絵のイチゴであったのに、どうしてですか」って。みんながびっくりしたんです。こんなところに目がいく先生がいるんだって。

でも、それをばかにするんじゃないかって、「どうしてなの」とか言いながら、「できるだけ本物に触れるってなんだろうね」とか、「うちの園って、本物を大事にしてきたことが、こんなところに表れてるよね」とかって。逆に初めての人だから、違和感とか、なんか驚いたことを率直に言ってもらって、それを逆に前からいる人たちが振り返ったり。「これ、やめたほうがいいよね」とか、「こういうのはやったほうがいいよね」って語り始めると、なんか空気が動き始めるんですね。

やっぱり私は、立派な記録、先輩のようになりたいって憧れは一方でものすごく大事なんだけど、もう一方で、やっぱりどの人も居心地のいい園をつくっていくときに大事なことで、そういうことかなって思います。私はビデオも入れてるんだけど、写真をやったときに、初めて感じたのは、ビデオは主任とか研究者とか、外から来た人が撮って見せるんですよ。でも、写真や記録は、まさに保育をやった人自らが、共同してつくるんです。

その感覚が、私は、方法がどうこうじゃなくって、大事なことかなと思いますし、いろんなことをやられた保育園の超ベテランの園長先生が言われました、「いろいろやりましたが、うちの園で一番深かったのは、ある担任が困ったり、ちょっと気になってるんだっていうことをあらかじめ言った子どもについて、園のいろんな先生が、この子のこんなところ見たよっていうのを話してくれると、改めて子ども理解が深くなる。それは長く続く。

だから「環境について研修をやってみるのもいい、事例の検討をやってみるのもいい、でも、うちの園は、結局一番長く続いたのは、そういう子ども一人一人を理解していくための手だてだった」とおっしゃっておられました。それは園によって違うと思いますが、そんなところが、やっぱり大事なかなと思います。

永倉：また、まとめになるようなお話をいただきましてありがとうございます。皆さんそれぞれが、質問とか疑問とかをお持ちだと思いますし、今日、それを求めていらした方も多いと思いますけれども、今、先生方の話の中にあったように、それを「自分のものにしていく」というか、「自分で見つけていくこと」って、何よりも大事で。そういうところの、「自分からできること、今ここでできること」を探すっていうところがないと、やはり欠けている部分とかできないことっていうのに、ずっとしがみついてしまうことにもなってしまうのかな、というふうに思いました。

本当はもっといろいろな質問も来まして、聞かなくてはいけないこともあったんですけども、時間がだいぶ迫ってまいりましたので、それぞれの先生方に 3 分ほどお話ししたいなこうと思います。篠田先生から、どんなところでも構いませんので、一言ずつ、ご感想を

お願いします。

篠田：今日は、本当に参加させていただいて、私自身が大変勉強になったというのが、正直なところですよ。小学校肌の私で、なかなか園の幼児教育っていうのはどういったら、乳幼児教育っていうのはどういったものだろうかっていうのは、なかなか分からなかったんですが、乳幼児教育であれ小学校教育であれ中学校教育であれ、子どもを見るということは同じであると。子どもの幸せを願って、それぞれの場所で、どういうことをしていったらいいのかなっていうのは、考えなければならないなっていうのは、同じであると思いました。

ただ、私もこういう立場なんですけれども、皆さんが日頃保育をやっていると同時に、私も、毎日小学校へ行って、授業やりたいな、授業やりたいなって思っているのは、やっぱり先ほどからお話が出ている、わくわくした気持ち。子どもたちをわくわくさせることは、指導者である私たちが、今日、これやったらどういう反応出るかなとか、この算数のこの課題ぶつけたら、そしたら、あの子はどう私に対して持ってくるかなって、それが楽しみで授業をやっていたっていうのが。ところがうまくいくことばかりではなかったです。でも、それが楽しみでやってきたのかなって思っていましたので、先ほど、保育をつていったときに、失敗とかなんかうまくいかないとか、記録を取らなくっちゃ、ではなくって。子どもたちに、「えっ、今日、これやったらわくわくしちゃう」って、こっちもわくわくしちゃうとか、そういう気持ちっていうのは、自分が持ち続けたいと思います。今後、孫が生まれるのを楽しみにして、どうやって孫にわくわくさせようかな。そればかり考えております。以上です。

永倉：ありがとうございました。岡村先生、お願いします。

岡村：ありがとうございました。3つです。1つ目は、学びっていうのは、こういう学びもあるし、保育者は、やっぱり仲間を信じて、共に保育をつくり出すっていうのが、この保育の原点ではないのかなっていうふうに思ってます。で、やっぱり子どもを見て、子どもの感じる表情や動きから、その反応を読み取って、一緒に。つまり学習の学びもあります。が、子どもから学んで、保育者が保育者になるんだなって。

私はいつも学生さんに言うのは、免許証をもらったら保育士になれるって、そんなことはないんだよって。子どもから、親から、仲間から学んで、本物の保育者になるんだよって話をして、それを、やっぱり今日も改めて感じさせていただきました。そして、やっぱり教育っていうのは、教え込むことではなくって、引き出す仕事で。この仕事は、その子どもの可能性を信じて、そこに伴走する。それがすごい喜びであり、保育者の生きがいなんだなってことを、改めて感じさせていただきました。

最後に、子どもの遊びの質に関わって、やっぱり面白さの質っていう中身に、子どもが、興味関心持って意欲的に動く。じゃあ、これを保育場面で、平たく言えば何かあったら、「遊びの主人公になるという保育」を、やっぱりつくっていくことが、私は、その遊びの質という中の1つなのかな、っていうことを学ばせてもらいました。ありがとうございます。

いました。

宮里：皆様、とてもシンプルに最後のまとめを言われて、すごいなって。3 番目にならなきゃよかったって、逆に思ってるところです。本当に、でも、今日はいい時間を頂いたと思っています。感謝しています。そして、今のうちに、ちょっと上手にまとめられないんですけど、ちょっとだけお話しさせてください。

いろんな人が、うちの園に遊びに来てくれたり、見に来てくれたりする中で、ある夏に、しばらく来てくれた方が、「ああ、こども園の子」いうか、夏でしたので、2 号、3 号の子だったら、「ぐいぐい来るね」って言ったのが、すごくあって。ぐいぐい来るっていうのが、実際どういうことかなとも思うんですが、例えば、なんか分かる気がしたんですね。私は、やっぱ子どもといられる時間が、すごく自分にとっては一番いい時間で、それが、今は長くいられる時間もあるので、いっぱい感じたり、いろいろするんですが。

例えば、本当にいろんなお仕事をされてる方がいて、夜までのお仕事があるときに、そのときだけ預ける先がある方がいて、そのことがある、ユウちゃんって子なんですが、ちょっとそのとき、「ぐずぐずしたりで大変だね」って、前から言ってたんだけど、きつと一昨日ぐらいかな、そのお母さんとその子が、朝ゆっくり玄関口でして、なかなか入ってこないんだけど。それは別れづらくて入ってこれないのかなと思ったら、そのお母さんは、「今日は、夜も預ける日なので、そして、朝は逆に時間があるから、この子のぐずぐずにちょっとしばらく付き合ってるんです」って。朝 30 分ぐらい付き合っ、それはそれで入ったんだけど。

なんか、そう知りながら、そこ、お母さんがぐずぐずにしばらく付き合ったから、それでも、最後、ちょっとぐずぐずしたんだけど、その後、楽しく過ごし、そして、夜預かってもらう人が結構いい方で、次の日は、また元気に園に来ていたり。いろんなふうなお仕事の関係も込みで、その子は“今”っていう時間を、一生懸命過ごしてるな。そこに、やっぱり私たちはいろんな形で伴走をしているなって思いました。

見えてなかった子どもの過ごし方の 1 つを、私は、ずっと幼稚園っていう大変限られた過ごし方をしてるお子さんだけを見てきましたので。今、さまざまな形でいながら、みんな懸命に育っている人と共にいる時間を、まだしばらく積み重ねられますので、いっぱい学びたいって、そこからいろんなことを考えたいと思っています。

こども園に朝行く途中、いつも笑っちゃう一生懸命なお父さんは、どうやら、その日は夜会議らしいんですね。で、前に弟、後ろにお兄ちゃん乗せながら、こぎながら、「いいか、父さんは今日遅いぞ、泣くなよ」って言いながら自転車こいでるので、もう笑っちゃうんですね。絶対泣くなあとか思いながら。で、お父さん、すごく一生懸命入れるので、子どものリュックを自転車に置いてきちゃうから、「そこから動くなよ」とか言いながら、リュック取ってきて、「ちょっとお父さん、落ち着け落ち着け」ってのがあるんですけど。

なんかそういうことが、4 月 5 月のときは、わあ大変とか、いろんなこと抱えてる人たちがいて、どうしたらとか思ったんだけど、今は、何だかいとおしいっていうんですか。そ

ういう中で、一生懸命だけど。でも、「みんなで、子どものこと大事に、一緒に育てていく仲間だね」、っていうふうになってる気がします。なんかぐいぐいくるっていうことを、ちょっと思いました。

あと、もう1つは、今、私は希望の話をしましたが、園のコンセプトで、5つの和を、5つの人とつながる地球とつながるって、ちょっと大きく出たんですが。家庭とつながる地域とつながるっていうのに、最後に、遊びがつながるって、そこだけ「が」ってしたんですけれども。私の中では、こんなふういろんなことを言っていますが、遊びがつながる連続性や深まり、その部分を、この限られたスペース、あるいは多様な時間帯を過ごす子どもたちと、多様な色合いが織り込まれるような保育の中で、どうやって深まりや連続性を保障する、っていうかつくり上げていくのか。それはこれからだなと思っているところです。

まだまだこれからだな、っていう思いを、今日思いながら、でも、たくさん学ぶことができたので、また頑張っていきたいと思ったところです。ここにいらっしゃってる先生方は、皆さん、そういう思いの方々、あるいは、それを支えている養成の先生方でしょうか。皆さんで、一緒に子どもたちのいい時間をつくっていけるような仲間になれたらいいな、と思いました。ありがとうございました。

秋田：ありがとうございました。まとめにはなりませんが、私の友人がよく言います。シンガポールでは、土曜日には教員の研修や保育者の研修は禁じられています。なぜか。月曜日から金曜まで一生懸命働いたら、リフレッシュというものが。で、日曜日は、やりたいという本人の意思があれば、参加していいって決まってるんだそうです。

日本人って、真面目ですよ。でも、私はすごく真面目に、より良くしていくことは大事な一方で、程頃合いっていうのか、朝は気持ちよいのが良い。先生が疲れていたら、やっぱり感覚が鈍ってくっていう感じってある。やっぱり、なんかにこやかに、そんな十分な研究がいつもやれるわけじゃないけど、気持ちよく受け入れてくれて、子どもと一緒に楽しめたり、その四季折々の感覚を感じられるっていうような、そういう感性的なところとか。何でしょう、やっぱり子どもと触れ合って、肌で感じてくれるとか、そういうところが、本当に人と人との絆をつくったり。乳幼児期に一番大事なところ。で、それが忙しくなり過ぎると、麻痺していくんですね。

だから、私たちは、保育者として働く権利と同時に、学ぶ権利、一方できちんと休んで、それで、ふさわしい、やっぱり社会的な待遇を保障されるっていう、そういう社会をつくっていかないと。今どんどん長時間になり、大変になってきています。それをもう一度、やっぱり考えながら、先生たちがご自分で健康をコントロールしてくださる。

そして、私伺っていつも思います。こども園になった園に伺っても、うまくいってる園って、やたら園長が明るいとか前向きの園って多いんですよね。やっぱりあんまり深刻っていうよりも、これって、本当に研修なの、笑ってるのっていうぐらい、みんなが楽しく進んでいけるような、そういう園の雰囲気をつくり出してくっていうことが大事かなって

思っ。それは小中でもそうですけど、思うところす。

それから、あと最後に、今日、レジメを先に配らなかつたのと同じで、お話ししてることがあります。こうやって、たくさん情報が入ると、学んだ気になります。でも、そこで入ってきた情報のうち、本当に明日明後日の保育につながるためには、何が大事かっていうと、沈黙して2〜3分でいい、帰りの電車やどっかでいい、今日の中で、何か1つ心に決めて、こんな工夫ができるかなって思っ。くださる、その1人で振り返る時間が、実は一番学びになります。

たくさん情報は、今日、1日あつたと思います。でも、その中で、なんかそういう時間を学ぶっていうことを、たくさん研修を受けるとか、時間を受けるじゃなくて、なんか心の中に深く刻み込んでいく。そんな時間が、この後取っていただけたらうれしいなど、いっぱいしゃべり過ぎな秋田が言うから、矛盾していますが、そんなふうに思っ。本当に、どうもありが。ございます。

永倉：本当に、ありが。ございました。秋田先生のおっしゃる、禁じられた研修でしたけれども、皆さん、いかがだったでしょうか。皆さんのお顔を見ていると、研修なんだけど、リフレッシュした、ホッとしたような顔が増えたように感じております。

今日、私は、この席でいろいろな方のお話しを聞いたり、先生方のお声を聞いたりしている中で、いろいろ考えさせられました。最初にファクスで参加の申し込みをいただいたときに、いろいろな、「こういうことが困っているよ」「こういうことを何とかしたいんだけど」っていう、本当に悲痛な声がたくさんあつたんですね。その声に、私たちは果たして応えられるんだろうかと思っながら、このシンポジウムを開いたわけです。

ですけれども、今日のお話の中で、皆さんもそうだと思うんですけれども、もう当たり前のことですね。やっぱり子どもの声を聞くっていうこととか、仲間と一緒にそれを支え合いながらやってくっていう、もう本当に当たり前のことが、一番早道なんだな。そこが欠けてしまうと、先には進めないんだなと、そういうことを感じながら、話を聞いていました。

今日、私たちは、参加した方が、一人一人主役になつてつくる会にしようと思っつつ、せつかくの質問に答え切れなかつたことは、誠に申し訳なかつたと思います。けれども、今ここでできないことではなくて、できることを考えるという。で、しかもそこに、ちょこっとっていうの、とてもすてきな言葉だなと思っ。んですけど、深くを求めすぎずに、ちょっとだけ、半歩だけ歩いてみよう、っていうつもりでやり始めるというのは、とても大事なのではないかなと思っ。

そして、今日ご登壇いただいた方の話を聞きながら、いろいろな保育のやり方がありましたよね。私も、初めて聞くものがたくさんありました。これからも保育者は、これからの時代の保育者っていうのは、保育ってこういうものだからっていう、私も体に染み付いた自分が保育者だったときの1日の過ごし方とか、子どもへの対応の仕方ってのがあると思っ。んですけど、それをもう1回問い直すっていうことも大事なのかな。

朝来て、「おはよう」で、3人しかいない園っていうので、宮里先生がびっくりした。そういうことなんだと思うんですね。こういう世界も保育であったんだなっていうこと。こういうことを考えると、こうやってそれぞれの違う園のやり方を知っていくっていうことが、私たちがそれによって、やり方を知って、自分なりにやっぱりアレンジしていくっていうことだと思うんですね。「自分でつくる」っていうことが、これから求められるのではないかと思います。

実は、ここの今参加者の中には、当然本学の学生さんもいますけれども、他大学の学生さん、それから、公立園の先生、私立園の先生、株式会社の方、それとこども園、幼稚園、保育所、小規模保育所、小学校、行政の方、本当にいろんな方が、この場に集まっています。

私はそれで、すごく感激したんですけれども、15年くらい前に、高杉自子先生っていう、大変保育に造詣の深い方が、もうこれからの保育をみんなで考えなくちゃ、連携しなくちゃと、「小学校との連携」っていうことで、もういろんな小学校に通知を出して参加者を集めたところで、大きな会場にいて、小学校からの参加者が2名とか3名とかそのぐらいだったんです。それでも高杉先生ががっかりされて、「これが今の現状なんですね」って、おっしゃったことを思い出します。

それを思うと、今、ここの参加者をみただけでも、皆さん、今、保育が動いていると思いませんか。だから、ピンチの時代なんだけれども、これはもしかしたら、すごいチャンスなのかもしれないというふうに思いました。中だけではなくて、いろいろな人たちとつながって、今日、ここでお知り合いになった方がいたら、ぜひそこで、またつながって、こういうふうに考える会を、それぞれの所で始めていただければと思います。

で、ぜひ、先ほどのお願いですけれども、もし、またすてきな実践ができましたら、私達も頑張ってシンポジウムやりますので、「できたよ」と、ご報告いただいて、またこちらにご登壇いただければと思います。今日は、本当に長い時間でしたが、熱心な話し合い、ありがとうございました。そして、つたない司会で、十分深めることができませんでしたが、これで、後半のシンポジウムを閉じたいと思います。ご協力ありがとうございました。最後に、先生方にもう1回、大きな拍手をお願いします。

副島：シンポジストの先生方、どうもありがとうございました。永倉先生も、ありがとうございました。それでは、閉会に当たりまして、本学学科長であります漁田俊子のほうより、ごあいさつとさせていただきますと思います。

漁田：本日は、本当にたくさんの皆さまにおいでいただきまして、ありがとうございます。先ほど、ちょっと名簿を見せていただいたんですけれども、北は小山町から、南は伊豆の方から、それから、浜松も西の方から、たくさんの先生方、行政の方においでいただきました。こんなうれしいことはございません。

実は、今朝、学長がごあいさつの時に、そこに書いてありますように、静岡県立大学創

立 30 周年記念事業ということで、これをやりますよと申し上げました。県立大学が総合大学として 30 年目です。その下にもっと大きい字で、「こども学科」って書いてあります。実はこども学科は今年の 4 月に出来上がったので、まだ 8 カ月しかたっていません。12 月に入って、やっと 9 カ月児になったところで、まだしゃべることも立ち上がることもできない状態の 0 歳児でございます。

実はこの今回のシンポジウムを企画いたしました狙いのひとつというのは、こども学科のお披露目ということでございまして、県短にこども学科ができたんだねっていうふうに、ちょっと頭の片隅に置いて、お聞きいただくと、大変うれしいです。

今日、私も保育の質を高めるとはどういうことかという視点で、朝から勉強させていただきました。普段いろんなところの研修会とかで呼んでいただくと PDCA サイクルを回すということを口うるさく申し上げていて、それこそ保育の質を高めるんだって、ちょっと聞かれると苦々しく思ってたしやる方もいるんじゃないかなと思うんですけども。

今日、保育の質を高めるっていうことで、もう 1 つ思ったのは、評価表を記録するとか、それから研修会を実施するっていうことと、保育の質を高めるっていうことが、なんとなく直結して感じられて、堅苦しくて嫌だなと思われてると思うんですけど、私もちょっとそう思っていました。

今日勉強させていただいて学んだことは、例えば、岡村先生がおっしゃった、「ちょこつと記録」。あれは PDCA サイクルだと思ったんですね。あるいは、困ったよっていうことで、おっしゃっていただいた、お茶大幼稚園の遠足から帰ってきてから、「疲れた子がいるんでどうするかな」っていうふうに考えて。それで、今年は駄目だけど、来年、2 人ぐらい、早く迎えに来てくれたって。それも PDCA サイクルだなと思ったんです。

どうすればいいかなっていうとき、ちょこつと振り返って、こんなふうにやってみようかなっていうことが、小さいことで一個一個の積み重ねが、恐らく保育の質を高めるっていうことにつながるんじゃないかなと、私は、今日、いろんな先生方のお話をお聞きして、考えさせられました。

ということで、本当に遠くから、いろんな先生に来ていただき、あと行政の方もおいでいただいて、このような場を設定できたということは、こども学科の喜びです。今年度 2 月から、こども学科の 0 歳児ちゃんの学生たちが、初めて教育実習や保育実習に伺うことになります。たくさんの園の先生方、そのようなことですので、初めてですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

副島： 漁田先生、ありがとうございました。今、漁田のほうから説明をさせていただきましたけども、私ども、1 年目ということで、いろいろ不慣れな点もあるとは思いますが、今、今日、シンポジストの先生方がおっしゃっていただいたように、私ども、保育の仲間の一員として、ぜひ加えていただいて、皆さま方とつながりを持たせていただいたら、ありがたいかなと思います。どうぞ、今後とも、よろしくお願いいたします。